

キャンプ研究

Japan Journal of Camping Study

Vol.25 2022.1

公益社団法人日本キャンプ協会
National Camping Association of Japan

未来テクノは、
あらゆる繊維素材の
加工を行います。



ターポリン・帆布の縫製・ウェルダー加工なら

前田工織グループ

 未来テクノ株式会社

東京都港区芝公園2-4-1 芝パークビルA館12F
TEL:03-6402-5915 FAX:03-6402-5916

www.mirai-techno.jp

キャンプ研究

第25巻 2022年1月15日発行

目 次

研究論文

- 大正時代から昭和時代前期までの社会事業における
組織キャンプを表わす用語「慈善旅行」「修學旅行」
—雑誌『東京府慈善協會報』より『社會福利』に至るまでに掲載された記事をもとに— 3
中島 豊
- コロナ禍にある大学生のメンタルヘルスと自然とのふれあい経験の関連 15
佐藤 冬果・窪田 辰政
- 大学生のキャンプ指導経験量が
ヒューマンコミュニティ創成マインドに及ぼす影響··· 25
伊原 久美子

実践報告

- コンピテンシーとキャンプ
—デイキャンプを通してコンピテンシーは育成できるか— 37
渡邊 尊斗・倉品 康夫

資 料

- 「キャンプ研究」投稿規程 45
「キャンプ研究」収録題目一覧 47
「日本キャンプミーティング」発表題目一覧 53

編集後記

研 究 論 文

**大正時代から昭和時代前期までの社会事業における
組織キャンプを表わす用語「慈善旅行」「修學旅行」
—雑誌『東京府慈善協會報』より『社會福利』に至るまでに
掲載された記事をもとに—**

Terms used to describe organized camp in social work from the Taisho period to the pre-war era of Showa period : “Jizen-ryokou” and “Syugaku-ryokou” ; Based on articles published by the magazine “Tokyo-fu-Jizen-kyoukai-hou”(later known as “Shakai-fukuri”)

中島 豊(長野大学)

Yutaka NAKAJIMA(Nagano University)

Abstract

The author examines the history of organized camps in Japan from the perspective of social work. The purpose of the study is to clarify terms used to describe organized camps in articles published by the magazine “Tokyo-fu-Jizen-kyoukai-hou” (later known as “Shakai-fukuri”).

The first research report was published last year, which clarified the use and development of “Kyuka-syuraku”, “Rinkan-gakko”, and “Tenjū (including Tenjū- hoiku)”.

The second research report revealed the following.

“Jizen-ryokou” was started by the Jiji Shimpo (newspaper publisher) in 1901, and its implementation can be confirmed until 1909. “Fukudenkai-ikuji-in” (foster home) began in the summer of 1901 and held its fourth camp in 1921. “Jizen-ryokou” can be described as camps for poor children and orphans who lived below the poverty line, which was held by collecting donations from philanthropists and others.

“Shugaku-ryokou” in social work was implemented by the Inokashira Gakko, which was a reform school, from 1920 and was held until 1932. This term was used only at the Inokashira Gakko. All other terms were used in school education. Therefore, “Shugaku-ryokou” in social work can be regarded as an exceptional use of the term “Shugaku-ryokou”.

Keywords

organized camps, social work, Jizen-ryokou, Syugaku-ryokou, the Taisho period.

1. 問題及び目的

筆者は、日本における組織キャンプの歴史について、社会福祉(歴史的には社会事業^{注1)})の視座から解明を試みようとしている。

その切り口として、1917(大正 6)年に慈善事業の連絡・研究、災害救済事業等の実施を目的に設立された東京府慈善協會が発刊した『東京府慈善協會報』から始まる機関誌を用いた。この機関誌は、東京府慈善協會が1920(大正 9)年、財団法人東京府社会事業協會と改称されたため、『東京府慈善協會報』も『東京府社会事業協會々報』(1925(大正 14)年より表記が『東京府社会事業協會報』に変更)と改題され、さらに1929(昭和 4)年より『社会福利』と改題された。本稿では、これらを当該誌と記す。

当該誌において、組織キャンプの意味を表わすとはぼ判断できる1940(昭和 15)年までの記事57本を分析し、結果を本誌第24号に報告した²¹⁾。これが第一報である。そこでは、当該誌での掲載頻度が高かった「休暇聚落^{注2)}」

「林間学校」「轉住^{注3)}」について、それらの使われ方と我が国に導入されてからの展開過程を報告した。また、「キャンプ」はファミリーキャンプや登山でのキャンプなどの意にも当時より用いられていることから、組織キャンプの意で用いられている「キャンプ」の初出も報告した。

しかしながら、組織キャンプを意味する用語はまだ幾つもあり、上記以外では、当該誌での掲載順に挙げると、「慈善旅行」「修學旅行」「林間幼稚園」「天幕生活」「臨海学校」「林間童話学校」「健康集落」「林間兒童學園」「臨海聚落」「臨海保育」「野營生活」「夏季聚落」があり、紙幅の関係から未検討のまま残った。そこで、第二報となる本稿では、掲載順に「慈善旅行」と「修學旅行」を取りあげることとした。

これら二語の当該誌での初出記事は、

1921(大正 10)年に『東京府社会事業協會々報』として発行された第16号に「福田會育兒院兒童第四回夏期慈善旅行」¹³⁾と「東京市養育院井之頭學校夏季修學旅行」^{14)-①}である。なお、当該誌に組織キャンプの記事が初めて載ったのは、1917(大正 6)年の『東京府慈善協會報』として発行された第3号の「保育所聯合幼兒夏期轉住事業」^{注4)}であった。その後1921(大正 10)年までの間に、これら以外の組織キャンプに関する記事は掲載されていない。

本稿の目的は、「慈善旅行」と「修學旅行」の二語について、①初回開催からその後の経過を含めて展開過程を明らかにすること、②社会事業における使われ方の特徴、また社会事業以外の分野でも使われている場合はその場合も含めて使われ方の特徴を明らかにすることである。

表記について、固有名詞と引用文、及び「修學旅行」など組織キャンプを表わす当時の用語は、旧字体を使用した。

2. 方法

方法は、以下の手順を取った。

- ①「慈善旅行」と「修學旅行」について、当該誌の記事を検討し、それらをふまえて実施団体が発行した、上記の両用語や関連用語を含む報告書などについても検討する。その際、組織キャンプといえるかどうかの判断は、公益社団法人日本キャンプ協会³⁾の定義によった。その定義は以下の通りである。「ある目的を達成するために十分に準備され計画されたプログラムを持ち、野外でのグループ活動や共同生活を通して、キャンパーに対して楽しく創造的でかつ教育的な体験や場を提供するキャンプのこと」「また、(略)参加する個々のキャンパーの身体的、精神的、社会的成長に寄与するための指導者と自然環境が用意される」。
- ②当該誌より組織キャンプを意味する用語を

抽出できたことから²¹⁾、上記二語について、国立国会図書館のデジタルコレクションの中の「インターネット公開資料」「図書館送信資料」及び「国立国会図書館内限定資料」(以下、国会図書館資料)にあたり、昭和時代前期^{注5)}の終わる1945(昭和20)年から遡り最も古いタイトルを調べる。また、朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱ」(以下、朝日データベース)にもあたり、創刊の1879(明治12)年から1945年までの記事を調べる。閲覧は2021年6～8月である。

3. 結果

3-1. 「慈善旅行」

福田會育兒院^{注6)}が行なった「慈善旅行」と表記されるタイトルについて、他に使用例がないか、国会図書館資料と朝日データベースを検索したところ、時事新報社^{注7)}と神戸婦人会^{注8)}の記事を中心に幾つか見られた。そこで、それらを整理してみると以下の通りとなる。

3-1-1. 「慈善旅行」の展開

時系列に沿い、実施期日、実施主体、実施地、出典(文末の引用文献番号)の順で示す。

- ①1901(明治34)年3月26日～30日、時事新報社(第1回)、神奈川県鎌倉・江の島、8)
- ②1901(明治34)年5月19日、神戸婦人会、兵庫県舞子、6)
- ③1901(明治34)年7月(男子)と8月(女子)、時事新報社(第2回)、適当地、7)
- ④1901(明治34)年8月3日～24日、福田會育兒院(第1回)、栃木県塩原温泉、22)-①
- ⑤1902(明治35)年6月(男子)・7/8月(女子)、時事新報社(第3回)、栃木県日光(男子)・神奈川県鎌倉(女子)、9)
- ⑥1902(明治35)年8月1日～15日、福田會育兒院(第2回)、神奈川県鎌倉、22)-①
- ⑦1903(明治36)年、時事新報社(第4回)、神奈川県箱根塔ノ沢、10)

⑧1909(明治42)年8月1日～5日、時事新報社(第6回)、静岡県伊豆修善寺・沼津、11)

⑨1917(大正6)年10日～26日、東京府慈善協會、千葉県八幡宿、12)

⑩1921(大正10)年8月1日～28日、福田會育兒院(第4回)、13)

なお、名称について、④は「避暑保育」、⑨の主催者は「轉住事業」と表記しているが、「慈善旅行」に含めた理由は考察で述べる。

「慈善旅行」という用語は、その使用が確認できた最終年は⑩の1921(大正10)年であることから、資料の上では20年間ほど使われていたことになる。

3-1-2. 福田會育兒院の「慈善旅行」

福田會育兒院は、1901(明治34)年8月に、「避暑保育」という名称で栃木県の塩原温泉に院児45人を3週間「轉地保養」させている^{23)-①}。目的は「旅遊を試み(略)智育、體育を進め、間接に徳育上の感化を受くること」としている^{23)-②}。活動は具体的に示されていないが、指揮監督者を置き、院児を8人から10人の組に分け、各組に付添保母をつけている。この事業を行なうにあたり、「古河市兵衛氏、三井一家を始め、内外有志の金圓を義捐せられし者三十二名、物品を寄贈せられし者二十八名」、寄附金総額151円20銭^{22)-④}と物品の寄附を受けている。

翌年8月にも15日間(延長し3週間との記載もあり)、鎌倉の光明寺と補陀洛寺を宿舎にして、院児のうち幼児47人(男児20人に保母2人、女児27人に保母3人)を連れて、海水浴、海岸散歩、貝殻拾い、江の島遊覧、歴史的談話などを行なっている。同様に金品の寄附を受け、「金圓者總て壹百名、寄附物品貳拾貳點、人員拾七名」、寄附金総額216円70銭と前年よりも増して、この回から「慈善旅行」と名乗っている^{22)-⑤}。

そして、1921(大正10)年、第4回が実施さ

れている。同年8月1日より28日まで、千葉県館山町慈恩院にて行なった。その動機となったのは、シベリアにいたポーランド孤児375人を福田會育兒院が前年に受け入れ^{注9)}、その中の数十人が腸チフスに罹患したことにある。彼らの帰国後、院児の「健康を増進する必要」から「慈善旅行」を決行したのだという。その概要は次の通りである¹³⁾。

参加者は、総勢62人で、12歳以下の院児38人、助手雑務に従事させた13歳以上の院児6人、保母4人、その他の指導者6人、事務員4人、炊事係ほか4人であった。日課は、起床5時、洗面・掃除6時まで、朝食6時半、海水浴7時～10時、教習10時半、昼食11時半、遊戯は午後、おやつ14時、夕食16時、散歩18時まで、入浴19時まで、談話20時まで、就寝20時となっていた。プログラムは、宿舎近辺での海水浴や遊戯のほか、千倉七浦海岸や灯台への遠出、近在の那古観音への見学や館山湾内の島巡りなどを行なっていた。保健上の成績は、身体面からは体重の増加があった院児31人、精神面からは「非常に快活」となったことや見聞を広めたことが「一種の誇り」となったこと、「平日(日常の意と思われる)の話題を豊富にしたる喜び」など「心機を一轉したるの感あり」と報告者は記述している。寄附については「滞在中金品を寄贈せられたる者十数名」とある。

この後の展開は、「慈善旅行」は用いられず「轉住保育」という名称で、1924(大正13)年8月は沼津、それ以前は「毎年千葉縣北條」にて実施している¹⁵⁾。なお、北條とは上記館山町のことと思われる^{注10)}。

3-1-3. 時事新報社の「慈善旅行」

次に、時事新報社の展開過程をみていくと、国会図書館資料における同社が行なった「慈善旅行」の最も古い記事は、1901(明治34)年4月発行の『慶應義塾學報』第38号に「新趣

向の慈善旅行」として掲載されている⁸⁾。

それによると、「時事新報社にては、西洋諸國に於る大都會の新聞等にて、廣く慈善資金を募り、其集得金額に應じて、數十名乃至數百名の貧民子女を集め來り、之に相應の監督者を添へて郊外の保養所に送り、二三日乃至一週間の遊樂を爲さしむる例に倣ひ、先づ試験的に同社自から費用を辨じて、芝新網其他の貧民窟より、最も事情の憐れむ可き貧民の子女五十名を選抜し、(略)諸氏及び數名の婦人之が監督者と爲り、同社にて新調せし衣服に着更へさせ、去月^{注11)}二十六日鎌倉に慈善旅行を試み、爾後數日間鎌倉江ノ島等の諸地に於て、思ふ存分の遊樂を遂げしめたり」と報じている。

時事新報は日々、記事を載せている⁵⁾。1日目の記事では、鎌倉は「海道にて山もあれば野原もあり魚を取るも面白ければ浪渉際(なみうちぎわ)を遊び廻はるも亦愉快ならん」と自然の中で遊ぶ趣旨を掲載している。プログラムとしては海岸散歩、江の島への遠足、貝拾い、鎌倉見物、地引網、宿舎の広場での相撲や運動会などが確認できる。

また、同行した戸波³⁰⁾によると活動の様子と成果について「監督者は子女を率ひ、(略)寢食を共にする」「監督者の下に朋友の互に信ずべきを悟り、規律の守る可く命令の服すべきを知り、愉快なる生活中に大なる社會的經驗を得たる」と記している。メンバーを固定しての小集団活動は行なわれていなかったようであるが、指導者である監督者の下、プログラムや生活場面に応じて集団をつくり、共同生活を送っていたようである。

時事新報社主催の第2回「慈善旅行」は、「その結果甚だ良好なりしより今回さらにまた第二回の実行を企て目下寄付金の募集中なり」と、同年7月発行の『東京市養育院月報』第5号に書かれている⁷⁾。また「第一回の際盡力せられたる眞宗大谷派の僧侶白山謙致^{注12)}

及び東京婦人矯風會^{注13)}會頭潮田ちせ子^{注14)}に全然打ち任せ、白山氏は七月下旬に男兒の組を牽ひ、潮田婦は八月上旬女子組を引率して、孰れも適當の地を撰びて出發せらるゝ由」と、第2回から男女の行き先が分かれ、別々に実施されている⁷⁾。

第3回は、1902(明治35)年6月「男子部は本月十日眞宗大谷派の僧侶白山謙致師之を引率して野州日光に赴き、女子部は七八月の交^{注15)}婦人矯風會の潮田ちせ子等之を率いて多分鎌倉邊に遊ぶ」と報告されている⁹⁾。第4回は、箱根の塔ノ沢で実施している¹⁰⁾。

時事新報社主催の「慈善旅行」は、他の雑誌でも取り上げられ、1909(明治42)年まで確認できる¹¹⁾。

3-1-4. 神戸婦人會の「慈善旅行」

さらに、神戸婦人會が行なった「慈善旅行」の記事を整理した。国会図書館資料を遡ったところ、時事新報社に次いで検索されたものである。『東京市養育院月報』に報告が掲載されている⁶⁾。

時事新報社の初回は1901(明治34)年3月であったが、神戸婦人會は5月19日に日帰りで実施している。「十九日舞子にて試みられたり、當日此行に加はりたるものは豫て特志警官に依頼して選擇したる貧民の兒童八十五名にして、内男子四十八名女子三十七名なり、(略)特志監督者として自から其任に當りたる神戸小學校の男女教員十二名に引卒(原文ママ)せられ、山陽鐵道會社の寄附に係る八時五十分發の列車に搭じ舞子に向けて出發したり、着後(略)、競争、旗奪、炮烙割り、相撲及び綱引き等の遊戲をなさしめ、優勝者には賞品を與へ、午餐及び夕餐を同所にて済まし四時五十九分舞子發の列車にて神戸へ歸へり」と報告されている。また、新聞では集合地点より神戸の駅まで「隊伍を組みて」とあり、団体行動をしていたことが窺われる。さらに「會員

より金員物品の寄附を募集したが之も中々好景氣で山鐵(前出、山陽鐵道)會社は特に貸切列車を寄附」と寄附についても触れている²⁷⁾。

3-1-5. 『婦人週報』の「慈善旅行」

上記以外の「慈善旅行」という表記は、時代が下がって1917(大正6)年8月發行の『婦人週報』^{注16)}に掲載された「初めての大きな海へー府の慈善旅行の一行に加わる記」である²⁷⁾。これは当該誌において最初の組織キャンプの記事として掲載された、東京府慈善協會が同年夏に実施した「保育所聯合幼兒夏期轉住事業」^{注4)}の初日に同行した記事である。

東京府慈善協會では「夏期轉住」(轉住保育)と称していたわけだが、記事では「慈善旅行」と表記している。

3-2. 修學(学)旅行

「修學旅行」については、東京市養育院^{注17)}井之頭學校^{注18)}の報告がある。井之頭學校は学校とは名乗るものの1900(明治33)年の感化院法による感化院^{注19)}であり、文部省が認可した学校ではない。学校教育の用語として使われている「修学旅行」が、当時は社会事業で使われている。社会事業における「修學旅行」及び「修学旅行」の使用を国会図書館資料と朝日データベースで検索したところ、井之頭學校の報告しか見当たらず他は全て学校教育関係であった。

3-2-1. 東京市養育院井之頭學校の「修學旅行」

当該誌における記事は、1921(大正10)年、千葉県安房郡船形町にある東京市養育院安房分院を宿舍として実施した報告である^{14)-①}。同校の「修學旅行」は、参加可能な在學生を一隊46人ずつに分ち、7月23日～31日と8月3日～12日に行なわれた。年齢は10歳～21歳である。隊の編制について「一隊は(略)

七班に分ち各班に正副班長一名づゝをおきて可成自治的に其班に屬する生徒の世話を爲さしめ、附添監督の職員は兩團とも五名づゝで何れも男職員のみであった」と記されている。目的は「平素兎角身も心も限極され勝ちな校内寄宿舎生活から生徒を廣い自然の前に開放し之によって十分大自然の感化に浴せしむると共に大に自治の訓練を爲さん」とするものであった。行程は、学校を 5 時半に出発し吉祥寺駅まで徒歩、吉祥寺駅から東京駅までは電車、そこから靈岸島^{注 20)}までは徒歩、靈岸島から汽船で横浜、横須賀を經由して 17 時半、船形町波止場に到着したとある。期間中のプログラムは、午前・午後に水泳・砂遊び・徒歩競争・相撲、朝夕の散歩、夜の唱歌・室内遊戯などであった。

この記事によると、「夏季修學旅行を行ふことになったのは昨年来の事」「昨年は八月十二日より行はれた」とあり、前年からの活動であることがわかる。なお、その後については『東京市養育院月報』にときおり短報や写真が載る程度で、毎年実施されていたのかどうか、いつまで実施していたのかなどの全容は不明である。判明する限りの実施状況を以下に期日、先後発の別、号数の順に整理した。

1920(大正 9)年 8 月 12 日より 1 週間^{14)-①}

1921(大正 10)年 7 月 23 日～31 日及び 8 月 3 日～12 日^{14)-②}

1925(大正 14)年 先発隊(7 月 28 日～8 月 3 日)・後発隊(8 月 5 日～11 日)、第 289 号¹⁶⁾

1928(昭和 3)年 先発隊(8 月 5 日撮影)、第 325 号¹⁷⁾

1928(昭和 3)年 後発隊(8 月 13 日撮影)、第 326 号¹⁸⁾

1930(昭和 5)年 先発隊 61 名(8 月 2 日撮影)、第 349 号¹⁹⁾

1932(昭和 7)年 先発隊(7 月 30 日撮影)・後発隊(8 月 7 日撮影)、第 373 号²⁰⁾

3-2-2. 教育用語としての「修学旅行」とその進展

「修学旅行」について、学校教育ではどう位置づけられているのか、いつから行なわれたのか、法令上の位置づけはどう経過してきたもののかなどを調べたものが以下である。

現在、文部科学省の小学校・中学校・高等学校の各「学習指導要領」では、「修学旅行」は「特別活動」の「学校行事」の中に位置づけられており、「平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、よりよい人間関係を築くなどの集団生活の在り方や公衆道徳などについての体験を積むことができるようにすること」と示されている^{注 21)}。

嚆矢は、公益財団法人全国修学旅行研究協会のホームページによると、1886(明治 19)年 2 月に行なわれた東京師範学校の「長途遠足」であるという²⁹⁾。また、用語としての初見は、同年 12 月に発行された『東京茗溪会雑誌』第 47 号の「修學旅行記」⁴⁾であるという^{1)-①}。

教育法令上に初めて現れるのは 1888(明治 21)年の「尋常師範學校準則」においてである²⁾。「修学旅行ハ定期ノ休業中ニ於テ一ケ年六十日以内トシ可成生徒常食以外ノ費用ヲ要セサルノ方法ニ依リテ之ヲ実施スヘシ」^{24)-①}とされていた。

1892(明治 25)年に改定された文部省令第八号「尋常師範學校ノ學科及其程度」の「説明」において、「夏期休業及学期末休業等成ルヘク適當ノ時期ヲ撰ヒ教員ヲシテ生徒ヲ率テ修学旅行ヲナサシメ山川郊野ヲ跋涉シテ其身体及精神ヲ鍛鍊スルト共ニ知見ヲ広メシメンコトヲ務ムヘシ(略)」^{24)-②}と方法と目的を明示している。

その進展は、新谷^{25)-①}の「遠足・修学旅行の歴史」をふまえると、以下のようになる。

「(東京)師範学校に端を発したが、すぐにそれ以外の諸学校にも普及し、尋常中学校、

高等小学校など男子の中等教育機関において師範学校同様に行軍に史跡見物、自然観察などの要素を取り入れ」て実施されていくようになる。鉄道を主とした交通機関が発達するにつれ、加えて1899(明治32)年に官設鉄道の運賃割引が通信省次官から回答され、その措置が図られると、行軍の要素が取り去られ、「身体鍛錬という要素より『修学』の要素が強くなり、さらに集団での旅行という非日常的な行動は物見遊山という方向に変わって」いくことになる。例えば「松本尋常小学校では、目的が『精神修養、地歴見学ノ為メ』とされ」、「大阪の北野中学校でも、1909(明治42)年には汽車を活用して名所旧跡を中心としたもの切り替わっていった」と記されている。つまり、文部省令第八号の「説明」の「知見ヲ広メシメンコト」に力点が置かれるようになっていったといえよう。

こうした経過をふまえ、星野は「『修学旅行』の用語は(略)明治二〇年代に普及し定着していったものと思われる」^{1)-①}、さらに「明治末—大正年間—昭和初期の一九三〇年代に至る、およそ三〇年余、戦前の修学旅行の一つの時代となった」^{1)-②}と指摘している。

3-2-3. 夏季修養・夏期修養会の実施

大正時代になると、文部省令第八号の「説明」にある「山川郊野ヲ跋涉シテ其身体及精神ヲ鍛錬スル」内容を含んだ活動が行なわれてくるが、初期のような行軍主体ではなく、心身の鍛錬や健康増進を目的とした、自然の中での活動となっている。それは「修学旅行」とは名乗らず「夏季修養」「夏期修養会」といった名称で実施されている。

具体的には、「松本市立各学校教育概況 大正十三年度」^{25)-②}には、「夏季修養」として「夏季休業ヲ利用シ登山臨海等適宜ノ方法ニヨリ転地シテ保育及ビ鍛錬ヲ行フ、数年来行ハワレタルモノ」とあり、新谷はこれを「林間学

校、臨海学校に近いもの」と認識している。なかでも松本尋常高等小学校^{注22)}では「夏期修養会」が開かれ、「尋常5年は『中房温泉、山田温泉、洪温泉』、尋常6年は『鯨波、郷津』への海水浴」と記され、「『自然ニ親シマシメ見聞ヲ広クセシムル』『健康増進』が実質的目的だったようである」^{25)-②}と指摘している。

4. 考察

4-1. 「慈善旅行」

福田會育兒院の事業は、「避暑保育」「慈善旅行」「轉住保育」と名称が変転しているが、目的、対象、形態は同一と思われる。資料が限られているため全てに明確でない点もあるが、計画されたプログラム、野外での活動、共同生活や集団活動、院児の成長に寄与するための指導者と自然環境の用意といったキャンプの要件は備えていると推定できよう。

初回は「避暑保育」としていたが、すでに示した通り金品の寄付を受けている。第2回から「慈善旅行」を名乗っている。その違いについて資料では説明されていない。しかし、初回報告には、宿舎が「宿料を低減」、鉄道会社が「乗車賃金の三割を減せらる」、医師が「特志施療を引受け」など^{22)-③}随所に「慈善家の餘恵」が書かれている^{22)-②}。第2回報告にも同様に寺が「宿所を貸與」、鉄道局が「乗車料の半額を低減」、軍医が「施療を引受け」など書かれている^{22)-⑥}。報告の過半は誰が何を援助(寄附)してくれたかにある。なお、第5回以降は「轉住保育」と名乗っているが、資料には寄附についての言及はない。初回を除いて、寄附の有無が「慈善旅行」を使うかどうかの基準となっているように思える。

時事新報社の「慈善旅行」は、自然の中で活動する趣旨を伝えているが、資料にはプログラムの具体的記載は少なく概要のみ理解できる。集団活動について、小集団は不明であるが結果で示した通りプログラムや生活場面

に応じて行なわれ、共同生活を送っていた。

戸波³⁰⁾は、当時の日本では「夏期休業、及び冬期休業を利用して、山水明媚の勝地をトし、茲に遊歴し、旅行し、心身の修養を計るは盛んに行なわるゝ」ものの、それは「紳士學生の間にのみ行なはるゝに止ま」っている一方「先進文明諸國に於ては、夙に慈善家の同情に依りて此の種の旅行、遊歴の窮兒社會にまで普及せらるゝに至りたる」が、日本では「無告の窮兒をして、この恩恵に沐浴せしむるの企てなき」状況にあるという。

そのような中であって同社の「慈善旅行」の説明は「西洋諸國に於る大都會の新聞等にて、廣く慈善資金を募り、其集得金額に應じて、數十名乃至數百名の貧民子女を集め來り、之に相應の監督者を添へて郊外の保養所に送り、二三日乃至一週間の遊樂を爲さしむ」というものであった⁸⁾。『慶應義塾學報』のいう「新趣向の慈善旅行」の「新趣向」とは、以上の説明をふまえれば、参加対象児を貧困児に絞ったことにあると思われる。

神戸婦人會の「慈善旅行」は、日帰りのデイキャンプといえるかどうか、一度きりの実施だったようで集めた資料では限界があり判断しづらい。海岸という自然の場を利用した野外における活動で、団体による活動とみなせば、デイキャンプと言えなくもない。この活動も、貧困児を対象として会員はじめ寄附と善意によって行なわれたことに特徴がある。

『婦人週報』の「慈善旅行」は、主催者は「轉住保育」としているのに、「(実施費用の)不足は有志の人及び東京府からの補助」²⁸⁾という点を捉えてであろうか、記事では「慈善旅行」としている。どこに視点を置いて判断するかにより、使用する用語が違って来る例だと思われる。

以上のことから、「慈善旅行」とは、全ての主催者の活動がキャンプであると言い切れないものの、企業や慈善家などから実施資金と

なる寄附を集め、貧困児や貧困状態にある孤児を対象にしたキャンプといえよう。

時事新報社、神戸婦人會、福田會育兒院と相次いで行なった事業間の情報共有や連携などについては、神戸婦人會の「慈善旅行」を伝えた神戸又日新報に「何日(いつ)か時事新報で舉行したさうだ」²⁶⁾とあるくらいで資料からは見いだせない。

4-2. 「修學(学)旅行」

文部省は「修学旅行」について、省令第八号の「説明」では自然の中での活動も想定していたわけであるが、実際は「修学旅行」と銘打って行なわれた形跡は資料からはなく、「夏季修養」「夏期修養会」といった名称で実施されている。

そういった用語を使ったのは、目的の違いを認識してのことのように思える。「夏季修養」では「保育及び鍛鍊」であるし、松本尋常高等小学校の「修学旅行」の目的は「精神修養、地歴見学ノ為メ」であったのに対し、「夏期修養会」のそれは「自然ニ親シマシメ見聞ヲ広クセシムル」と「健康増進」が実質的目的だったことから、「修学旅行」とは別の用語を使ったと思えてならない。

ところで、東京市養育院井之頭學校の「修學旅行」は、報告を読むとキャンプの要件を満たしていることが理解できる。目的は「廣い自然の前に開放し之によって十分大自然の感化に浴せしむると共に大に自治の訓練を爲さん」とするもので、「夏季修養」「夏期修養会」と共通するものがあり、そうであれば「夏季修養」あるいは「夏期修養会」と呼べるようなものであったと思えるが、そういう用語は使わず「修學旅行」と銘打っていた。ましてや感化法により、感化院の学齡児童は「義務教育を教授する存在としては位置づけられなかった」^{23)-①}ため「感化院の学習指導は、学校教育とは違った固有の理念と指導論理を

自ずから培っていった。同時に関係者の間では、感化教育は学校教育をもってかえがたいものであるという自信やプロ意識がうまれ、それが感化教育界でながく引き継がれた」^{23)-②}と指摘されている。

学校教育をもってかえがたい感化教育独自の教育理念と方法があるのであれば、学校教育に倣う「修学旅行」ではなく別の用語が使われてもよいと思われるが、そうしなかった理由はわからない。

井之頭学校において「修学旅行」を用いた理由は資料上、見い出せないが、国会図書館デジタルコレクションと朝日データベースで調べる限り、社会事業においてキャンプを「修学旅行」として呼称している例は井之頭学校のみであり、社会事業としては唯一の使い方とみてよいであろう。

5. まとめ

東京府慈善協會が発刊した『東京府慈善協會報』から始まる機関誌において使われた組織キャンプを意味する用語のうちの「慈善旅行」と「修学旅行」について、開催経過とその使われ方を含めて特徴を明らかにしてきた。

「慈善旅行」は、時事新報社や福田會育院などによって1901(明治34)年に始められ、全ての主催者の活動がキャンプであるとはいえないものの、貧困児や貧困状態にある孤児を対象にして、企業や慈善家などから実施資金となる寄附を集めて行なわれたキャンプといえよう。

「修学旅行」は、学校教育で使われてきたが、井之頭学校ではこれをキャンプとして1920(大正9)年より実施していた。社会事業において、キャンプを「修学旅行」として呼称している例は井之頭学校のみであり、唯一の使い方とみてよいであろう。

注

- 1) わが国の社会福祉の発達史では、慈善事業→感化救済事業→社会事業→厚生事業→社会福祉と変遷する。社会事業という用語は、社会情勢の変化や労働問題の顕在化の中で、救貧から防貧への政策変更により、1920(大正9)年に内務省救護課が社会局に昇格した際、業務に加えられ法令上に明記された。
- 2) 先行書の多くに名前が挙がるスイス・チューリッヒ市の牧師ワルター・ビオン(Walter Bion)が始めたFerienkolonienを訳した言葉である。ビオンは、1876(明治9)年、組織をつくり効果を確認して方法を確立したとされている。中司利一(1994、病弱・身体虚弱教育、日本大百科全書、小学館)によると、休暇集落(=休暇聚落)とは休日や長期休暇を利用して郊外の外気や日光に浴させ、健康の回復を図ることを目指して行なわれた教育活動のことで、外国では19世紀中ごろデンマークなどで実施されたとしている。
- 3) 社会事業においては、「休暇聚落」「林間学校」も使われているが使用頻度は低く、「轉住保育」「不轉住」を含む「轉住」が最も多く使われている。これは、Ferienkolonienをふまえて発意、実施されたと推察される「保育所聯合幼児夏期轉住事業」(1917)において、おそらく初めて用いられたことから、その後もこの呼称が定着したものと思われる。「轉住」は、こののち託児事業(現在の保育)ではキャンプを表わす用語として使われた。
- 4) 東京府慈善協會が、会長である東京府知事の発意により、市内の富豪などの寄附を得て貧民の多い地域において幼児保育事業を経営する団体と諮り、児童48人と役員15人で、8月10日～26日、千葉縣市原郡八幡町の宮吉長五郎の控家を借用し実施

した。

- 5) この表記は、社会福祉法人全国社会福祉協議会のホームページにある「全社協 100 周年～そのあゆみと記念事業～」になった。
- 6) 当該法人ホームページの「沿革」によると「1876(明治 9)年、各宗の高僧の発議により福田会を創立。寺院を中心に児童養護施設里親委託等を開始」とある。また表紙には「今川貞山・杉浦謙・伊達自得の三名の発議により創立され、寺院を中心に日本で最初の児童養護施設の運営を開始しました。福田会の名称は、田園を耕し種をまけばまくほど秋になると収穫が多く得られるように、人間社会においても「善い行いの種をまけば多くの幸福の実が得られる」という仏教の福田(ふくでん)思想に基づいています」と説明されている。何度か移転したのち当時は東京府南豊島郡渋谷町下渋谷(現在の渋谷区広尾)にあった。
- 7) 1882(明治 15)年、福澤諭吉により創刊された戦前の五大新聞の一つ。慶應義塾大学およびその出身者が全面協力して運営した。1936(昭和 11)年に廃刊となり、『東京日日新聞』(現『毎日新聞』)に合併された。(時事新報社、Wikipedia を参考)
- 8) 神戸市内の紳士または教養・品位を備えた一流商人の夫人たちが多くを占める婦人団体。(引用文献 2)を参考)
- 9) 1569 年に成立したポーランド・リトアニア共和国は、1795 年にオーストリア・ロシア・プロイセンによる第三次ポーランド分割により消滅した。政治犯はシベリアに送られ、その子孫や第一次世界大戦を逃れたポーランド人が、1917 年のロシア革命当時、シベリアなどに 15～20 万人ほど住んでいた。1918 年にポーランドは独立を果たすが、シベリアに暮らすポーランド人は帰国することができない者も多かった。特に孤児や孤児同然の子ども達は、身を寄せ

る場所や食料にも困る極限状態で孤立していた。そこで 1919 年、ウラジオストクで結成された「ポーランド児童救済委員会」が日本に救援を訴え、外務省は日本赤十字社に救済を依頼した。1920 年、その第一陣を福田会が引き受けた。(①土屋學、孤児救済 よみがえる絆、日本経済新聞、2016 年 1 月 25 日記事、②ポーランドの歴史、及びコシチュシュコの蜂起、Wikipedia、③宇都栄子・菅田理一・松井昭男・小笠原強(2020)ポーランド児童救済事業と福田会、日本社会福祉学会第 68 回秋季大会ポスター発表を参考)

- 10) 1933(昭和 8)年に館山町と合併して館山北條町となるが、この時点では北條町であった。宿舎となった慈恩院は館山町にあったが、最寄駅が現在の内房線の前身である北條線の「安房北條」であったことから、北條と呼んでいたと思われる。(①鐵道省運輸局編(1925)汽車時間表、1(1)、136、日本旅行文化協會、②北条町(千葉県)、Wikipedia を参考)
- 11) 「先月」の意。
- 12) 東京市芝区三田にあった西蓮寺の第 16 代住職。慶應義塾の出身、三田佛教會講師。仏教や真宗の教えなどを説く著作が数編ある。(①西蓮寺ホームページ、②小泉仰(1994)福沢諭吉と宗教、国際基督教大学図書館公開講演集、8、17 を参考)
- 13) 19 世紀米国の禁酒運動を組織した米国女性キリスト者禁酒同盟から発展した世界女性キリスト者禁酒同盟の特派員が来日し、その刺激を受け 1886(明治 19)年、東京日本橋教会において潮田千勢子や矢嶋楫子ら 56 名を以って「東京婦人矯風会」を結成した。「矯風会」としたのは、禁酒ばかりではなく、風を「矯める」(正しくないものを直す)会という趣旨からである。1893(明治 26)年、神戸などにあった同様

- の団体と合併して日本キリスト教婦人矯風会を結成。禁酒、禁煙、廃娼運動などを推進。平和運動(軍縮)にも関わる。(①日本キリスト教矯風会ホームページ、②2014、ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典、ロゴヴィスタを参考)
- 14) 潮田千勢とも表記される。1845(弘化2)年～1903(明治36)年。社会運動家、婦人伝道者。飯田藩侍医・丸山龍眠の次女として江戸藩邸で生まれる。1865(慶應元)年、同藩の潮田健次郎と結婚。1882(明治15)年、キリスト教受洗。翌年、夫と死別、翌々年、上京。桜井女学校附属保母科、のち横浜聖純女学校を1890(明治23)年に卒業し、幼児保育や婦人伝道者として活躍。1886(明治19)年、東京婦人矯風会の発起人に名を連ねる。1897(明治30)年、会頭となる。(五味百合子編(1980)続 社会事業に生きた女性たち、ドメス出版を参考)
- 15) 「月の変わり目の頃」の意味と思われる。
- 16) 雑誌記者である小橋三四子(1883(明治16)年～1922(大正11)年)が、婦人週報社を興し編集人となって発行した雑誌。発行期間は1915(大正4)年から1919(大正8)年まで。(①国立国会図書館デジタルコレクション 書誌情報、②日本キリスト教女性史(人物編を参考)
- 17) 1872(明治5)年、明治新政府が維新の混乱による困窮者救済のため、営繕会議所(徳川幕府時代の七分積金を扱った町会所の後身)の附属機関として養育院掛を設け、身寄りがなく、かつ自活能力もない老人・病人・孤児など老幼240人を収容したのが養育院の始まりである。その後、経営は東京府(1876)、東京市(1890)と替わる。
- 18) 養育院の中に、1900(明治33)年、いわゆる非行少年を入所対象とする感化部(感化法の定める感化院)が設けられ、1905(明治38)年、府下武蔵野村字吉祥寺にこれを移転し、「井之頭学校」と改称して開設され、1939(昭和14)年まで設置されていた。(注17)と注18)は①2014、ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典、ロゴヴィスタ、②1960、都史紀要、7、東京都公文書館、③デジタル版 渋沢栄一伝記資料を参考)
- 19) 感化法では、入院者を①地方長官ニ於テ満八歳以上十六歳未満ノ者之ニ対スル適当ノ親権ヲ行フ者若ハ適当ノ後見人ナクシテ遊蕩又ハ乞丐ヲ為シ若ハ悪交アリト認メタ者、②懲治場留置ノ言渡ヲ受ケタル幼者、③裁判所ノ許可ヲ経テ懲戒場ニ入ルヘキ者と定めている。それらの者を保護・教育し更生を図る感化救済(福祉)施設である。
- 20) 江戸時代初期に隅田川河口右岸の島に靈巖寺が建てられたところから靈岸島(または靈巖島)と呼ばれた。現在の中央区新川一・二丁目。
- 21) 小学校学習指導要領(平成29年告示)第6章 特別活動 学校行事 2 内容 (4)遠足・集団宿泊的行事、中学校学習指導要領(平成29年告示)及び高等学校学習指導要領(平成30年告示)第5章 特別活動 学校行事 2 内容 (4)旅行・集団宿泊的行事。小学校学習指導要領では本稿に掲出した文章の前に「自然の中での集団宿泊活動などの」という文が加わり、より自然の中での活動を意識したものになっている。
- 22) 松本藩の藩校に起源を持つ小学校で、1873(明治6)年、学制による開智学校として創立。小学校令の公布により1888(明治21)年、松本開智尋常小学校と改称、さらに翌年、松本尋常小学校となり、1890(明治23)の小学校令により1892(明治25)年、松本尋常高等小学校となった。(松本市と文部科学省の各ホームページを参考)

引用文献

- 1) 星野朗(1997)修学旅行の歴史(戦前の部)、地理教育、26、①7、②10
- 2) 伊ヶ崎暁生(1983)近代日本教育史の中の修学旅行、地理歴史教育、349、13
- 3) 公益社団法人日本キャンプ協会指導者養成委員会(編)(2017)キャンプディレクター必携、公益社団法人日本キャンプ協会、2
- 4) 無署名(1886)修學旅行記、東京茗溪会雑誌、47、1-26
- 5) 無署名(1901)慈善旅行日記、時事新報、明治34年3月27日～31日記事
- 6) 無署名(1901)神戸の慈善旅行、東京市養育院月報、4、7
- 7) 無署名(1901)第二回慈善旅行、東京市養育院月報、5、8
- 8) 無署名(1901)新趣向の慈善旅行、慶應義塾學報、38、73
- 9) 無署名(1902)第三回慈善旅行、東京市養育院月報、6、8
- 10) 無署名(1903)慈善旅行、朝日新聞、明治36年7月3日記事
- 11) 無署名(1909)時事新報社の慈善旅行、寫真タイムス、8、ページ番号なし
- 12) 無署名(1917)保育所聯合幼児夏期轉住事業、東京府慈善協會報、3、12-16
- 13) 無署名(1921)福田會育兒院兒童第四回夏期慈善旅行、東京府社會事業協會報々報、16、135-138
- 14) 無署名(1921)東京市養育院井之頭學校夏季修學旅行、東京府社會事業協會々報、16、①138-144、②138
- 15) 無署名(1924)福田會の轉住保育、兒童研究、27(12)、508
- 16) 無署名(1925)井之頭學校生徒の修學旅行、東京市養育院月報、289、口絵、9
- 17) 無署名(1928)房州船形海岸に赴きたる井之頭學校生徒、東京市養育院月報、325、口絵
- 18) 無署名(1928)房州船形海岸に於ける井之頭學校生徒、東京市養育院月報、326、口絵
- 19) 無署名(1930)房州船形海岸に赴きたる井之頭學校生徒、東京市養育院月報、349、口絵
- 20) 無署名(1932)房州船形海岸に夏期旅行中の井之頭學校生徒、東京市養育院月報、373、口絵
- 21) 中島豊(2021)、大正時代から昭和時代戦前期までの社会事業における組織キャンプ(その1)ー雑誌『東京府慈善協會報』より『社會福利』に至るまでに掲載された記事にみるキャンプを表わす用語ー、キャンプ研究、24、3-14
- 22) 中里日勝編(1901)鹽原溫泉避暑保育、福田會沿革畧史、福田會、①171-177、②171、③172、④173、⑤174、⑥176
- 23) 齋藤薫(1995)感化院の学習指導と学校教育ー内申書制度が感化教育に与えた影響ー、教育学研究、62(2)、①1、②2
- 24) 佐藤秀夫編(2002)学校行事を見直す、日本の教育課題、5、①436、②440、(なお当該書の資料の表記は現代仮名遣いである)
- 25) 新谷恭明(2002)遠足・修学旅行の歴史、佐藤秀夫(編)、学校行事を見直す、日本の教育課題、5、①396-403、②401
- 26) 春山坊(1901)兒童慈善旅行(一)、神戸又新日報、明治34年5月19日記事
- 27) 春山坊(1901)兒童慈善旅行(二)、神戸又新日報、明治34年5月20日記事
- 28) 民子(1917)初めて大きな海へー府の慈善旅行の一行に加はる記、婦人週報、3(33)、8-9
- 29) 東京師範学校の長途遠足(修学旅行)
<http://shugakuryoko.com/museum/rekishimuseum/4000-02.pdf>、2021年7月閲覧
- 30) 戸波留郎(1901)慈善旅行の所感、東京市養育院月報、3、ページ番号なし

コロナ禍にある大学生のメンタルヘルスと自然とのふれあい経験の関連

The Relationship Between University Students' Nature Experience and Mental Health Under the Spread of COVID-19

佐藤 冬果(東京家政学院大学) 窪田 辰政(静岡県立大学)

Fuyuka SATO(Tokyo Kasei Gakuin University)

Tatsumasa KUBOTA(University of Shizuoka)

Abstract

University students are at risk of psychological challenges because of the COVID-19 pandemic. And, this is known that nature experience shows a positive impact on human health. Thus, this paper aims to clarify the relationship between university students' nature experience and mental health. For this purpose, we conducted a questionnaire survey using (1) the simplified mental health scale for university students (MH) (Ohya, 2017), (2) the feelings toward nature scale (Shibata, 2016), (3) 7-point Likert scale survey about the frequency, likes/dislikes, and making-meaning of nature experience in childhood, and (4) 7-point Likert scale survey about the present frequency, likes/dislikes, volition for nature experience. This study examined 66 first-year undergraduate students (21 men, 45 women, $M=18.3$ years). We used (2)(3)(4) scales to divide subjects into groups, and their mental health scores were compared. Also, we calculated correlation between each score. The results showed that; (1) the MH score was significantly deteriorated compared with the previous study (Ohya, 2017). (2) There was no correlation between the present frequency of nature experience and the total score of MH, however, high-frequency group indicated a deteriorated score of "psychological aspect" sub scale compared with low-frequency. (3) There was no correlation between the frequency of nature experience in childhood and the total score of MH. (4) There was a positive and moderate correlation between the score of "oneness" sub scale of the feelings toward nature scale, and "positive aspect" sub scale of MH. Finally, the score of "oneness" had a moderate correlation with present "frequency", "making-meaning", and "frequency" in childhood, this implied connection among those factors.

Keywords

collegiate, mental health, contact with nature during childhood, feelings toward nature

1. はじめに

新型コロナウイルスの流行による混乱が続いている。大学教育も大きな影響を受け、多くの大学が遠隔授業の実施や課外活動の制限、キャンパスへの立入禁止などの対策を講じてきた。そのような中、外出の自粛が続く大学生は、友人と会えないこと、特に新入生にとっては友人を作れないことによって孤立や孤独感を感じたり、また、学業の中断やオンライン授業に対する不満を抱いたり、さらに大学生としてのアイデンティティの危機に直面したりと、様々なストレス因にさらされる状況にある。その結果、大学生たちが不適応や不安感を抱え、うつ状態や不安状態、依存症などに陥ることが危惧されている²⁾。このように、大学生の心身の健康をいかに維持増進するかは現代の重要な課題であるといえる。

コロナ禍においても個人が感染予防対策を講じつつ実践可能なリフレッシュ的活動の一つに、自然とのふれあいが挙げられる。これまでも、自然とのふれあいが心身の健康に肯定的な効果を及ぼすことは、様々な研究で示されてきた¹⁾³⁾⁵⁾。近年では、White *et al.*

(2019) による約 2 万人を対象とした大規模調査から、自然環境下に 1 週間に 120 分以上滞在した人は健康状態およびウェルビーイングが高いことが明らかにされている。またその自然体験は、長時間の滞在を一度であっても、短時間の滞在を複数回であっても両者に差はなく、1 日に 17 分程度でも自然を感じる場に身を置くことで、心身の健康を向上させる効果があることが示されている⁸⁾。この結果は、自宅周辺の公園など、身近な自然環境を感じる場に短時間であっても習慣的に出かけることが心身の健康の維持向上に有効な手段となる可能性を示しており、それは移動の制限が要請される現状のなかでも実践可能な取り組みの一つであると言える。

このように、人は自然によって癒される性

質を持っている一方で、大学生世代を迎えた個人が実際に自然とのふれあいを心身の健康維持の手段として活用するためには、その個人が自然とのふれあいに肯定的な認識を持ち、自然の中へ出かけようとする意欲をもっている必要があると言える。そして、それらの自然に対する認識や意欲が醸成された背景には、子ども時代の自然経験があると思われる。つまり、大学生がもつ自然への認識や、自然体験への意欲は、子ども時代の自然体験の頻度や、子ども時代に自然体験を好きだと感じていたかどうか、また、大人になった現在、当時の自然体験に意味を見出しているかどうかの影響していることが考えられる。また、芝田 (2018)⁷⁾によって、幼少期の生活環境が自然からの回復感や自然への親しみに影響を与えていることが示されているように、子ども時代の居住地の自然環境も、自然への認識に大きな影響を与えることが想定される。

以上のことから、次の 2 つの問いが生じる。第一に、コロナ禍にある大学生においても、自然とのふれあいは心身の健康の維持に関与しているのかという点である。しかし、コロナ禍の大学生のメンタルヘルスと自然体験の関連を検討した研究は見当たらない。そして次に、子ども時代の自然体験や居住地は、大学生の自然への認識や、自然とのふれあいの頻度に関係しているのか、ひいてはメンタルヘルスとも関連しているのかという点であるが、それらについても、研究はみられない。

以上を踏まえ本研究は、コロナ禍にある大学生の心理的な健康度（メンタルヘルス）を調査し、現在および子ども時代の自然とのふれあい経験、そして自然に対する認識との関連を明らかにすることを研究の目的とした。

2. 研究方法

2.1. 調査対象

A 大学において開講されている 1 年次対象

の全学共通科目「身体運動科学」のなかで実施された、「野外活動と心身の健康」をテーマとした特別講義に出席した履修生を調査の対象とし、男性 21 名、女性 45 名の計 66 名（平均年齢 18.3 歳±0.48）から有効回答を得た。

なお、本授業が実施された 2021 年 6 月末、A 大学は、実習や実験、実技系の授業を除いて多くの授業を遠隔授業に切り替えており、学生はオンデマンドやオンライン授業の受講を中心とした生活を送っていた。また、部活動やサークル活動などの課外活動についても 4 月中旬から屋内での活動が禁止されるなどの制限が続き、6 月には、学内での感染者の発生に伴い、「学内外を問わず全ての活動禁止」という活動制限が提示されていた。半数以上の学生が一人暮らしをする中、自宅でレポート課題に迫られ、また満足な通学や課外活動を行えずに、友人関係作りに苦慮している新生が多いことが課題として挙げられていた時期に相当する。

2.2. 調査の手続きと倫理的配慮

遠隔授業（オンデマンド型）形式で行われた講義動画の冒頭で調査について説明を行い、Google Form 上の調査フォームへアクセスし回答するよう求めた。

なお、本調査は授業の導入として実施され、自分自身の自然体験の経験を想起すること、また心身の健康に目を向けることを回答の目的として提示したが、調査の冒頭には、回答はすべて集団データとして統計処理され匿名性が保たれること、研究への協力は自由意思に基づくもので成績には関係しないことなどを説明し、倫理的配慮を実施した。

2.3. 調査内容

性別、年齢の基本データに加え、以下についての回答を求めた。

1) メンタルヘルス

大学生の心身の健康度を評価するため、大矢ら (2017)⁴⁾が作成した「簡易版大学生用メ

ンタルヘルス尺度」(以下、MH 尺度)の 22 項目について、大矢ら (2017)⁴⁾の調査と同様に、「はい (1 点)」あるいは「いいえ (0 点)」の 2 件法で回答を求めた。本 MH 尺度は、従来多く使用されてきた尺度と比較しても質問項目数が大幅に少なく、また、「はい」か「いいえ」の 2 択であることから回答者の負担軽減がされていることが特徴である。同時に、既存の精神的健康度に関するスクリーニング調査 (K6) との間の基準関連妥当性も高く、さらに信頼性が確認されている尺度であることから、本研究での使用に最適であると判断した。

なお、本尺度はポジティブな質問項目とネガティブな質問項目の 2 側面を含んでおり、「ポジティブな質問項目」には「自分の目標のために努力している」など 8 項目が含まれる。また、ネガティブな質問項目は「コミュニケーションの取り方に悩むことが多い」などの生活面、「夜、ぐっすり眠れないことが多い」などの身体面、「不安な気持ちになることが多い」などの心理面の 3 つの観点から構成された 14 項目が含まれる。「ポジティブな質問項目」は逆転項目であり、得点が低いほど、健康度が高いことを示す。

2) 現在の自然とのふれあい体験

現在の自然とのふれあい体験の「頻度」(今現在、自然の中で過ごす機会は「1:全然ない」～「7:たくさんある」)、「好き嫌い」(今現在、自然の中で過ごすことは「1:嫌い」～「7:好き」)、「意欲」(今後、自然の中で過ごす機会は「1:作りたいとは思わない」～「7:作りたい」)についてそれぞれ 7 段階での回答を求めた。

3) 子ども時代の自然とのふれあい体験

子ども時代の自然体験の「頻度」(子ども時代、自然の中で過ごす機会は「1:全然なかった」～「7:たくさんあった」)、「好き嫌い」(子ども時代、自然の中で過ごすことは「1:嫌いだった」～「7:好きだった」)、「意味づけ」(子

ども時代、自然の中で過ごしたことで、自分の成長や学びに繋がったと感じることは「1:全くない」～「7:たくさんある」について、それぞれ7件法で回答を求めた。また、子ども時代の居住地域について、「1:都心・都会」～「7:田舎・自然豊かな」の7段階で評価を求めた。

4) 自然に対する感情反応

大学生の自然に対する認識を検討するため、芝田 (2016) ⁶⁾ が作成した「自然に対する感情反応尺度」について、「1:まったくあてはまらない」から「7:非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。自然に対する感情反応尺度は、「緑豊かな自然の眺めを見るとほっとする」などの項目を含む「回復感」、「自然豊かな環境には親近感を感じる」などの項目を含む「一体感」、「古くて大きな木からは、何か神々しいものを感じる」などの項目を含む「神秘感」、「破壊された自然を見ると悲しくなる」などの項目を含む「関心・保護」、「森や山の中など、自然は暗くて薄気味悪いと思う」などの項目を含む「嫌悪感」の5つの下位因子からなり、それぞれ質問が4項目ずつ含まれる。

2.4. 統計分析

調査により得られた各得点について、逆転項目は逆転処理を行ったのち、MH 尺度合計点については、先行研究 ⁴⁾ の平均値を基準値とした1サンプルの t 検定を行った。MH 尺度得点の性差の比較や、群間の比較には対応のない t 検定を用い、また、MH 尺度の各質問項目については、カイ二乗検定を用いて先行研究 ⁴⁾ と回答の割合を比較した。そして2つの得点の相関分析には Pearson の相関係数を算出した。有意水準はいずれも5%未満とし、10%未満の場合は有意傾向とした。回答を基に群分けを行う際は、中間点である4点を除き、1～3点を低群、5～7点を高群とした。なお、1サンプルの t 検定には IBM 社 SPSS Statistics 28 を用い、その他の統計処理には js-STAR XR version 1.1.3j を使用した。

3. 結果および考察

3.1. コロナ禍にある大学生のメンタルヘルス

はじめに、大矢ら (2017) ⁴⁾ の調査結果との比較から、コロナ禍にある大学生である本調査対象のメンタルヘルスを検討した。なお、大矢ら (2017) ⁴⁾ の結果と本調査の結果を比較することには、新型コロナウイルス感染症の流行前後での得点比較という要因は含まれるものの、調査対象の大学が異なることなど、他の要因からの影響が統制されておらず、対照群として大きく課題が残る。しかし、大矢ら (2017) ⁴⁾ の調査は大学1年生72名(男性39名、女性32名、未記入1名)を対象に、8月上旬に調査を行っており、大学1年生の前期期間に実施された調査である点で本研究と共通している。また、本研究では回答者の性別に偏りが見られるが、MH 尺度合計点には性別間での有意差がないことが報告されている。大矢ら (2017) ⁴⁾ の調査を基に MH 尺度が開発されていること、一定の調査対象者数が確保されていること、また本尺度を用いた調査結果に関して、統計的に比較をする際に必要な詳細な数値を示した報告が他に見られないことなどから、本稿では大矢ら (2017) ⁴⁾ の得点との比較を行うこととした。

本研究の MH 尺度合計点の平均は $M=9.12$, $SD=4.22$ であり、大矢ら (2017) ⁴⁾ の得点 ($M=6.24$) を基準値とした1サンプルの t 検定の結果、本研究の値が0.1%水準で有意に高い値であった ($t(65)=5.54$, $p<.001$) (表1)。つまり、大矢ら (2017) ⁴⁾ の調査と比較し、本調査対象の大学生はメンタルヘルスが低い状

表1. 先行研究の値を基準としたときの MH 尺度得点合計点の1サンプルの t 検定結果

	n	M	SD	t
本研究の合計値	66	9.12	4.22	$t(65)=5.54^{***}$
大矢ら(2017)の値(基準値)		6.24		
男性	21	8.38	3.72	$t(44)=1.03^{n.s.}$
女性	45	9.47	4.35	

*** $p<.001$

態にあることが示された。なお、本研究においても、大矢ら（2017）⁴⁾の調査と同様、男性の平均値（ $M=8.38$, $SD=3.72$ ）と女性と平均値（ $M=9.47$, $SD=4.35$ ）の間に有意な差は認められなかった（ $t(44)=1.03$, $n.s.$ ）。

次に、本研究における MH 合計点の高さの要因を検討するため、各質問項目の「はい」「いいえ」の回答の割合に着目し、大矢ら（2017）⁴⁾の示した結果とカイ二乗検定を用いて比較を行った（表 2）。その結果、本調査では「ポジティブな質問項目」のうち「自分の目標のために努力している」に「はい」と答えた割合が 1%水準で有意に少なかった（ $\chi^2(1)=7.79$, $p<.01$ ）。大矢ら（2017）⁴⁾の調査が前期期間の最後にあたる 8 月に実施されており、試験やレポート提出など、特に努力が求められる期末期間が終了したタイミングでの調査であったことに対し、本調査は入学して間もない 6 月に実施されたという、時期の違いによる影響も考えられるが、感染予防対策として部活やサークル活動などの課外活動が制限されるなど、目標

に向けた努力をすることに様々な制限を受けたり、努力していることを実感しづらい環境の中にいる状況が影響している可能性も推察される結果となった。また、「コミュニケーションの取り方に悩むことが多い」（ $\chi^2(1)=4.15$, $p<.05$ ）、「食欲をコントロールできないことがある」（ $\chi^2(1)=16.47$, $p<.01$ ）、「不安な気持ちになることが多い」（ $\chi^2(1)=5.48$, $p<.05$ ）、「ささいなこと（こまかいこと）が気になる」（ $\chi^2(1)=16.88$, $p<.01$ ）、「自分の性格に悩むことが多い」（ $\chi^2(1)=9.69$, $p<.01$ ）、「他人の視線がよく気になる」（ $\chi^2(1)=24.59$, $p<.01$ ）、「何事も完璧にやらないと気がすまない」（ $\chi^2(1)=10.48$, $p<.01$ ）の質問項目について、本調査では「はい」と答えた割合が有意に多い結果となり、本研究の対象者は大矢ら（2017）⁴⁾の調査対象であった大学生と比較して、コミュニケーションの取り方や、他人の視線、自分の性格など、他者との関わりに関連する項目に関してのメンタルヘルスが低い状態にあることが窺えた。

表 2. MH 尺度の各質問項目の回答割合に関する大矢ら（2017）との比較の結果

		本調査の結果			大矢ら（2017）			大矢ら（2017） との比較 $\chi^2(1)$
		はい	いいえ	「はい」の割合	はい	いいえ	「はい」の割合	
ポジティブな 質問項目	分からないことを友達に質問できる	62	4	93.9%	68	3	94.4%	0.01
	自分の目標のために努力している	46	20	69.7%	64	7	88.9%	7.79**
	困ったときに相談できる人がいる	63	3	95.5%	63	8	87.5%	1.28
	大学生活で充実感や満足感を覚えることがある	52	14	78.8%	60	12	83.3%	0.22
	体の調子は良好である	50	16	75.8%	55	16	76.4%	0.00
	明るい気分になることが多い	42	24	63.6%	51	19	70.8%	0.94
	他人に好かれる方である	33	33	50.0%	36	35	50.0%	0.01
	活動的な方である	30	36	45.5%	35	36	48.6%	0.08
生活面	授業内容がほとんど理解できないことがある	26	40	39.4%	32	39	44.4%	0.25
	コミュニケーションの取り方に悩むことが多い	39	27	59.1%	29	43	40.3%	4.15*
	親や家族のことで悩むことが多い	10	56	15.2%	5	66	6.9%	1.55
	頭痛や肩こりがよくある	33	33	50.0%	32	40	44.4%	0.23
	夜、ぐっすり眠れないことが多い	22	44	33.3%	20	52	27.8%	0.27
	食欲をコントロールできないことがある	41	25	62.1%	19	53	26.4%	16.47**
	不安な気持ちになることが多い	46	20	69.7%	35	37	48.6%	5.48*
	ささいなこと（こまかいこと）が気になる	52	14	78.8%	31	41	43.1%	16.88**
ネガティブな 質問項目	自分の性格に悩むことが多い	45	21	68.2%	29	43	40.3%	9.69**
	気分が落ち込んでいることが多い	28	38	42.4%	23	49	31.9%	1.21
	他人の視線がよく気になる	49	17	74.2%	22	50	30.6%	24.59**
	生きているのがいやだと感じることもある	22	44	33.3%	17	54	23.6%	1.06
	何事も完璧にやらないと気がすまない	30	36	45.5%	13	58	18.1%	10.48**
	気になっていること、困っていることがあり、 カウンセリングを利用してみたい	9	57	13.6%	12	59	16.7%	0.09

※太字は有意な差がみられた質問項目 * $p<.05$, ** $p<.01$

本研究の対象者である大学生たちは、課外活動が制限されたり、対面での授業が少ない状況にあることで、入学後に知り合った友人や教員との直接の交流の機会が少なく、大学生としての自分が確立しづらいことで他者関係や自分自身に対しての不安を抱えている可能性が推察された。また、「食欲をコントロールできないことがある」に「はい」と答えた人数の多さは、自宅で外出を自粛する生活による影響も考えられる。

なお、本研究の中で「はい」と答えた割合が先行研究と比較して有意に多い項目である「食欲をコントロールできないことがある」、「自分の性格に悩むことが多い」の2つは、大矢ら (2017)⁴⁾の調査のなかで、男性に比べて女性の方が「はい」と答える割合が高いことが報告されている。本研究の対象者は女性の方が多く、それが本結果にも影響している可能性は除外できない。

表 3. 現在の自然とのふれあい体験の頻度
高低群間の MH 得点の比較

		M	SD	t
MH合計点	高群	9.46	4.15	$t(57) = 0.42$ <i>n.s.</i>
	低群	9.00	4.26	
ポジティブな質問項目	高群	1.93	1.77	$t(53) = 1.70$ [†]
	低群	2.67	1.53	
生活面	高群	1.07	0.92	$t(57) = 0.69$ <i>n.s.</i>
	低群	1.24	0.95	
身体面	高群	1.57	1.02	$t(57) = 0.56$ <i>n.s.</i>
	低群	1.42	1.05	
心理面	高群	4.89	1.91	$t(57) = 2.49$ [*]
	低群	3.67	1.82	

上段：高群 (n=28)、下段：低群 (n=33)

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$

表 4. 現在の自然とのふれあい体験と
MH 得点の相関

	M	現在の 好き嫌い	現在の 意欲	MH合計	ポジティブ	生活面	身体面	心理面
	(SD)	5.20 (1.41)	5.39 (1.30)	9.12 (4.22)	2.27 (1.71)	1.14 (0.93)	1.45 (1.03)	4.26 (1.97)
現在の頻度	3.73 (1.78)	0.40 ^{**}	0.44 ^{**}	0.08 ^{n.s.}	-0.21 [†]	-0.07 ^{n.s.}	0.06 ^{n.s.}	0.37 ^{**}
現在の好き嫌い	5.20 (1.41)	-	0.80 ^{**}	-0.08 ^{n.s.}	-0.24 [†]	0.02 ^{n.s.}	-0.05 ^{n.s.}	0.05 ^{n.s.}
現在の意欲	5.39 (1.30)		-	-0.20 ^{n.s.}	-0.33 ^{**}	-0.10 ^{n.s.}	-0.09 ^{n.s.}	-0.04 ^{n.s.}

n=66, 色付き：中程度 (0.4) 以上の相関, [†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$

一方で、「大学生活で充実感や満足感を覚えることがある」、「明るい気分になることが多い」など、大矢ら (2017)⁴⁾の結果と有意な差が認められない項目も多く含まれた。コロナ禍にあっても健康度が保たれやすい側面と、影響を受けやすい側面がある可能性が考えられ、今後の更なる検討が求められる。

3.2. メンタルヘルスと現在の自然とのふれあい体験の関連

現在の自然とのふれあい体験の「頻度」について、1～3点と回答した者を低群 ($n=33$)、5～7点と回答した者を高群 ($n=28$) に分け、MH 尺度合計点の平均値の差を検討したところ、高群 ($M=9.46$, $SD=4.15$) と低群 ($M=9.00$, $SD=4.26$) との間に有意な差異は認められなかった ($t(57)=0.42$, *n.s.*) (表 3)。しかし、下位因子ごとに同様の検討を行ったところ、「ポジティブな質問項目」においては、頻度高群の方が MH 得点が低い、つまり、頻度高群の方がより健康度が高い傾向がみられた ($t(53)=1.70$, $p < .10$)。自然の中に出かける習慣をもつことで、明るい気分になったり、自分を活動的だと評価するようになる可能性が考えられる。一方で、「心理面」の因子では、頻度高群の方が 5%水準で有意に得点が高く、頻度高群の方が健康度が低いという結果が示された ($t(57)=2.49$, $p < .05$)。しかし、自然とふれあう機会が多い場合でも心理面でのメンタルヘルスが低い状態にあるのか、あるいは、心理面に不安を抱えている個人が自然のなかへ出かける傾向があるのか、といった因果関係は本調査では明らかにできず、今後の検討が必要である。

また、現在の自然とのふれあい体験とメンタルヘルスの関係を検討するため、現在の自然とのふれあい体験の「頻度」、「好き嫌い」、「意欲」と MH 尺度合計点、および下位因子の相関係数 (r) を算出した (表 4)。現在の「頻度」と「好き嫌い」 ($r = .40$, $p < .01$)、「頻度」と「意欲」 ($r = .44$,

$p < .01$)の間には中程度の正の関連がみられ、「好き嫌い」と「意欲」との間には強い正の関連 ($r = .80$, $p < .01$) が確認された。そして現在の「頻度」および「好き嫌い」と MH 尺度の「ポジティブな質問項目」の間にはそれぞれ弱い負の関連がある可能性が示され ($r = -.21$, $p < .10$; $r = -.24$, $p < .10$)、さらに、現在の「意欲」と MH 尺度の「ポジティブな質問項目」の間には弱い負の相関が確認された ($r = -.33$, $p < .01$)。つまり、現在の自然とのふれあいの頻度の多さ、好きだという評価の高さ、そして自然とのふれあい体験への意欲の高さと MH の「ポジティブな質問項目」のに関する健康度の高さとの間に関係があることが示されたと言える。しかしこの点についても、自然とのふれあいに対しての意欲の高さが MH のポジティブな側面に影響を与えるのか、あるいは MH のポジティブな側面が高い者が自然とのふれあい意欲が高いのかなど、関係の方向性を検討するためには、より詳細な検討が必要である。

表 5. 子ども時代の自然とのふれあい体験の頻度
高低群間の MH 得点の比較

		M	SD	t
MH合計点	高群	9.12	4.40	$t(23) = 0.31$ n.s.
	低群	9.46	3.20	
ポジティブな質問項目	高群	2.15	1.74	$t(23) = 1.75$ †
	低群	2.92	1.27	
生活面	高群	1.06	0.93	$t(19) = 1.45$ n.s.
	低群	1.46	0.84	
身体面	高群	1.54	1.05	$t(22) = 1.13$ n.s.
	低群	1.23	0.8	
心理面	高群	4.37	2.07	$t(24) = 1.01$ n.s.
	低群	3.85	1.46	

上段：高群 (n=52)、下段：低群 (n=13)

† $p < .10$

3.3. メンタルヘルスと子ども時代の自然とのふれあい体験の関連

子ども時代の自然とのふれあい体験の「頻度」について、1～3 点と回答した者を低群 ($n=13$)、5～7 点と回答した者を高群 ($n=52$) に分け、MH 尺度合計点の平均値の差を検討したところ、高群 ($M=9.12$, $SD=4.40$) と低群 ($M=9.46$, $SD=3.20$) との間に有意な差異は認められなかった ($t(23) = 0.31$, n. s.) (表 5)。また、下位因子ごとに同様の検討を行ったところ、MH 尺度の「ポジティブな質問項目」において、子ども時代の体験高群の方が「ポジティブな質問項目」得点が低い、つまり、子ども時代の自然とのふれあいが多い者の方が、ポジティブな側面の健康度が高い傾向がみられた ($t(23) = 1.75$, $p < .10$) が、その他の因子で有意な差異は確認されなかった。

また、子ども時代の自然とのふれあい体験の「頻度」、「好き嫌い」、「意味づけ」、および「居住地域」の評価と、現在の「頻度」、「好き嫌い」、「意欲」、そして MH 尺度合計点、および下位因子の相関係数 (r) を算出した (表 6)。子ども時代の「頻度」と子ども時代の「好き嫌い」 ($r = .56$, $p < .01$)、「頻度」と「意味づけ」 ($r = .72$, $p < .01$)、「頻度」と「居住地域」 ($r = .62$, $p < .01$)、「好き嫌い」と「意味づけ」 ($r = .66$, $p < .01$)、「意味づけ」と「居住地域」 ($r = .44$, $p < .01$)の間にはそれぞれ中程度～高い正の相関がみられた。つまり、子ども時

表 6. 子ども時代の自然とのふれあい体験と MH 得点の相関

		子ども時代の 好き嫌い	意味づけ	子ども時代の 居住地域	現在の頻度	現在の 好き嫌い	現在の意欲	MH合計	ポジティブ	生活面	身体面	心理面
	<i>M</i> (<i>SD</i>)											
					3.73 (1.78)	5.20 (1.41)	5.39 (1.30)	9.12 (4.22)	2.27 (1.71)	1.14 (0.93)	1.45 (1.03)	4.26 (1.97)
子ども時代の 頻度	5.24 (1.54)	0.56 **	0.72 **	0.62 **	0.45 **	0.33 **	0.36 **	-0.02 ^{n.s.}	-0.22 [†]	-0.11 ^{n.s.}	0.13 ^{n.s.}	0.13 ^{n.s.}
子ども時代の 好き嫌い	5.58 (1.25)	-	0.66 **	0.22 [†]	0.11 ^{n.s.}	0.28 ⁺	0.33 **	-0.09 ^{n.s.}	-0.15 ^{n.s.}	-0.07 ^{n.s.}	-0.02 ^{n.s.}	-0.03 ^{n.s.}
意味づけ	5.30 (1.21)		-	0.44 **	0.30 ⁺	0.19 ^{n.s.}	0.27 ⁺	0.00 ^{n.s.}	-0.16 ^{n.s.}	-0.02 ^{n.s.}	0.07 ^{n.s.}	0.12 ^{n.s.}
子ども時代の 居住地域	5.20 (1.56)			-	0.28 ⁺	0.19 ^{n.s.}	0.16 ^{n.s.}	0.18 ^{n.s.}	-0.05 ^{n.s.}	0.09 ^{n.s.}	0.18 ^{n.s.}	0.20 ^{n.s.}

$n=66$, 色付き：中程度 (0.4) 以上の相関、† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

代の自然体験の頻度の高さと、子ども時代に自然体験が好きだったという評価、そして子ども時代の自然体験が自分の成長や学びに繋がったという評価の高さの間に強い関連があることが確認された。

また、子ども時代の「頻度」と現在の「頻度」($r=.45$, $p<.01$)、「好き嫌い」($r=.33$, $p<.01$)、「意欲」($r=.36$, $p<.01$)の間にも弱い～中程度の正の関連がみられた。つまり、子ども時代の自然体験の多さと、現在の頻度の高さ、そして現在の自然が好きだという評価には関連があることが示された。この子ども時代の自然体験の頻度の高さが、大学生での自然体験の実施頻度や好き嫌い、自然体験への意欲と関係するという結果は、子ども時代の自然体験の重要性を示すものであると言える。

しかし、子ども時代の自然とのふれあい体験と MH 尺度の得点との間には有意な相関はみられず、子ども時代の「頻度」と MH 尺度の「ポジティブな質問項目」の間に弱い負の関連がある可能性が示されるに留まった($r=-.22$, $p<.10$)。

以上のことより、子ども時代の体験頻度高群の方が「ポジティブな質問項目」に関する健康度が高い傾向はみられたものの、子ども時代の自然とのふれあいの頻度や、好き嫌い、意味づけの強さや居住地域と MH 尺度の得点との間には、直接的な強い関連はなく、他の要因が影響している可能性が考えられた。

3.4. メンタルヘルスと自然に対する感情反応の関連

芝田 (2016)⁶⁾が作成した「自然に対する感情反応尺度」の下位因子ごとの得点と、MH 尺度の合計点および下位因子得点、さらに子ども時代の体験（頻度、好き嫌い、意味づけ、居住地域）および現在の体験（頻度、好き嫌い、意欲）との間の相関係数(r)を算出した(表 7)。その結果、自然に対する感情反応尺度の「一体感」因子と MH 尺度の「ポジティブな質問項目」の間に中程度の負の関連が示され($r=-.44$, $p<.01$)、自然との一体感の得点の高さと、ポジティブな側面の健康度の高さの関連が示された。また同時に、「一体感」因子は子ども時代の「頻度」($r=.51$, $p<.01$)と「意味づけ」($r=.48$, $p<.01$)、現在の「頻度」($r=.49$, $p<.01$)とも中程度の正の相関がみられ、それらの要因同士の関連が示されたと言える。「一体感」因子には、「自然豊かな環境には親近感を感じる」「自然の中に自分の居場所のようなものを感じる」などの質問項目が含まれ、その得点の高さは、自然環境に親しみや、繋がりを感じていることを示している。この得点との間に中程度の関連が示された「ポジティブな質問項目」のなかにも、他者との繋がりに関する項目が含まれており、他の存在との繋がりの実感という質問の共通性が両者の得点に関連がみられた要因となった可能性も考えられる。

表 7. 自然に対する感情反応尺度と MH 得点、および子ども時代と現在の自然とのふれあい体験との相関

自然に対する感情反応尺度	M (SD)	自然に対する感情反応尺度					MH 尺度					子ども時代の体験				現在の体験		
		回復感	一体感	神秘性	関心・保護	嫌悪感	MH 合計	ポジティブ	生活面	身体面	心理面	子ども時代の頻度	子ども時代の好き嫌い	意味づけ	子ども時代の居住地域	現在の頻度	現在の好き嫌い	現在の意欲
回復感	22.53 (3.32)	-					0.09 ^{n.s.}	-0.17 ^{n.s.}	0.19 ^{n.s.}	0.00 ^{n.s.}	0.26 [*]	0.19 ^{n.s.}	0.16 ^{n.s.}	0.12 ^{n.s.}	0.14 ^{n.s.}	0.37 ^{**}	0.42 ^{**}	0.40 ^{**}
一体感	18.30 (4.74)	0.50 ^{**}	-				-0.07 ^{n.s.}	-0.44 ^{**}	0.04 ^{n.s.}	0.04 ^{n.s.}	0.19 ^{n.s.}	0.51 ^{**}	0.27 [*]	0.48 ^{**}	0.35 ^{**}	0.49 ^{**}	0.38 ^{**}	0.38 ^{**}
神秘性	20.36 (4.68)	0.40 ^{**}	0.41 ^{**}	-			-0.07 ^{n.s.}	-0.15 ^{n.s.}	0.10 ^{n.s.}	-0.19 ^{n.s.}	0.03 ^{n.s.}	-0.03 ^{n.s.}	0.13 ^{n.s.}	0.14 ^{n.s.}	0.00 ^{n.s.}	0.01 ^{n.s.}	0.01 ^{n.s.}	0.03 ^{n.s.}
関心・保護	23.18 (3.41)	0.50 ^{**}	0.42 ^{**}	0.32 ^{**}	-		0.01 ^{n.s.}	-0.22 [†]	0.09 ^{n.s.}	0.09 ^{n.s.}	0.11 ^{n.s.}	0.16 ^{n.s.}	0.16 ^{n.s.}	0.11 ^{n.s.}	-0.17 ^{n.s.}	0.22 [†]	0.27 [*]	0.28 [*]
嫌悪感	14.92 (4.57)	-0.26 [*]	-0.36 ^{**}	-0.08 ^{n.s.}	-0.06 ^{n.s.}	-	0.20 ^{n.s.}	0.23 [†]	0.21 [†]	0.17 ^{n.s.}	0.04 ^{n.s.}	-0.45 ^{**}	-0.24 [†]	-0.29 [*]	-0.30 [*]	-0.40 ^{**}	-0.61 ^{**}	-0.64 ^{**}

$n=66$, 色付き: 中程度 (0.4) 以上の相関, † $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$

また、「回復感」因子と MH 尺度の「心理面」因子の間にも弱い正の関連がみられ ($r=.26$, $p<.05$)、回復感の評価の高さと、メンタルヘルスの心理面の低さに弱い相関があるという結果となった。「回復感」因子には「緑豊かな自然の眺めを見るとほっとする」「木々の緑に癒しを感じる」などの質問項目が含まれる。MH 尺度の「心理面」の得点が高い者、つまり不安な気持ちや落ち込んだ気持ちを抱いているような学生が、そのような回復感を実感することで「回復感」因子の得点が高くなったことが推察されるが、因果関係の検討には更なる調査が求められる。

なお、「自然の中に行く」と靴や服が汚れるから嫌だ」などの質問項目を含む「嫌悪感」因子の得点が、子ども時代の頻度 ($r=-.45$, $p<.01$)、現在の頻度 ($r=-.40$, $p<.01$)、好き嫌い ($r=-.61$, $p<.01$)、意欲 ($r=-.64$, $p<.01$) との間に中程度以上の負の相関関係があることが示され、自然に対する嫌悪感の低さは、子ども時代や現在の自然体験頻度の多さ、好きだという評価、意欲の高さとの関係があることが確認された。大学生世代での自然体験の促進には、子ども時代に多く自然の中に出かけ、いかに自然体験への嫌悪感を軽減させるかが、重要な鍵となるのではないかとと思われる。

4. まとめ

本研究は、コロナ禍にある大学生のメンタルヘルスと、現在および子ども時代の自然とのふれあい経験、そして自然に対する認識との関連を明らかにすることを研究の目的とし、大学 1 年生 66 名に対し、大矢ら (2017)⁴⁾ が作成した「簡易版大学生用メンタルヘルス尺度」などに関する調査を行った。その結果、コロナ禍にある大学生である本研究の対象者の MH 尺度得点は、大矢ら (2017)⁴⁾ の調査と比較して健康度が低い状態であることが明らかとなった。この

背景には、課外活動の制限や遠隔授業などによって、大学生達が目標に向けて努力していることを実感しづらい環境の中にいることが推察された。

また、現在の自然とのふれあい「頻度」による群分けでは MH 尺度合計点に差異は見られず、一方で、現在の「意欲」と MH のポジティブな側面の健康度の高さの関係が示された。また、子ども時代の自然とのふれあいが多い者の方が、ポジティブな側面の健康度が高い傾向が示された。

そして、自然に対する感情反応尺度の「一体感」因子の得点の高さと、MH のポジティブな側面の健康度の高さの関連が示された。同時に、「一体感」因子は子ども時代の「頻度」「意味づけ」、現在の「頻度」とも中程度の正の相関がみられ、それらの要因同士が関連し合っている可能性が示唆された。

はじめに触れたように、自然とのふれあいが心身の健康を維持増進するということは、多くの先行研究で示されてきた。自然とのふれあいが、コロナ禍において外出の自粛が続く中で学ぶ大学生がより心身ともに健康に過ごすための手段となり得るかを示すうえで、本研究で示された尺度間の関連は一定の貢献をし得るものであると考えられる。しかし、本研究は 1 校の大学の一部の学部に限定された調査であり、また、統制群の設定や因果関係を検討するためのデータの取得をしていない点で、多くの課題が残るものである。より広い対象への調査や、Pre-Post デザインでの調査、質的アプローチなどを用いて、更に検討を進めていく必要があるだろう。

5. 参考文献

- 1) Capaldi, C. A., Dopko, R. L., & Zelenski, J. M. (2014) The relationship between nature connectedness and happiness: A meta-analysis, *Frontiers in psychology*, 5(976), 1-15

- 2) 梶谷康介, 土本利架子, 佐藤武 (2021) 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミックが大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響: 文献および臨床経験からの考察、健康、43、1-13
- 3) Kaplan, R., Kaplan, S. (1989) *The experience of nature: A psychological perspective*, Cambridge university press
- 4) 大矢薫, 長谷川裕, 北村拓也, 長谷川千種, 押木利英子 (2017) 簡易版大学生用メンタルヘルス尺度作成と新入生に対する調査研究、新潟リハビリテーション大学紀要、6(1)、35-44
- 5) 芝田征司 (2013) 自然環境の心理学: 自然への選好と心理的つながり, 自然による回復効果、環境心理学研究、1(1)、38-45
- 6) 芝田征司 (2016) 自然に対する感情反応尺度の作成と近隣緑量による影響の分析、心理学研究、87、50-59
- 7) 芝田征司 (2018) 幼少期の環境と自然との心理的つながり, 風景の回復感の関係、日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第 82 回大会 (pp. 1PM-119).
- 8) White, M.P., Alcock, I., Grellier, J., Wheeler, B.W., Hartig, T., Warber, S.L., Bone, A., Depledge, M.H., & Fleming, L.E., (2019) Spending at least 120 minutes a week in nature is associated with good health and wellbeing、*Scientific reports*、9(1)、1-11

謝辞 本研究の機会を下さった A 大学の関係者の皆さま、および「身体運動科学」受講生の皆さまに、この場を借りて深く御礼申し上げます。

大学生のキャンプ指導経験量が ヒューマンコミュニティ創成マインドに及ぼす影響

Influences of the amount of college student camp teaching experience on the Human and Community Development Mindset

伊原 久美子(大阪体育大学)

Kumiko IHARA(Osaka University of Health and Sport Sciences)

Abstract

The purpose of this study was to measure the Human and Community Development Mindset (HCDM) by comparing the amount of camp teaching experience of college students. The subjects were 351 university students who are group members of the Osaka Prefecture Camping Association. A comparative analysis was performed with 121 people in the highly experienced group and 86 people in the inexperienced group. The results were as follows:

1) The overall score of the HCDM was significantly different in the high-experienced group than in the low-experienced group. 2) There was a significant difference in leadership ability between the high-experienced group and the low-experienced group. 3) There was a significant difference in management ability between the high-experienced group and the low-experienced group. 4) There was a significant difference in planning ability between the high-experienced group and the low-experienced group. 5) There was no significant difference in negotiation ability between the low-experienced group and the high-experienced group. 6) There was no significant difference in communication ability between the low-experienced group and the high-experienced group.

Keywords

Camp counselor, Camp leader, Comparison of the amount of experience

1. 緒言

1.1. キャンプ指導者研究の現状と課題

我が国の組織キャンプは戦前戦後を通じて、いわゆる民間の青少年団体である YMCA や YWCA、ボーイスカウトやガールスカウトなどが牽引してきた。1960 年代には国立の自然の家や都道府県の公立の自然の家などが整備され、学校や地域の団体が組織キャンプを実施

する機会が増えた。1966 年には日本キャンプ協会が発足し、キャンプの普及や発展が加速、キャンプに携わる組織や団体も増加した。1980 年代には、民間の野外教育関係や環境教育に関わる団体が自然学校などの形態をとりながら組織キャンプを運営し始め¹⁵⁾、1998 年に特定非営利活動促進法(NPO 法)が施行されると多くの団体が NPO 法人化し、現在ではこ

のような団体を自然学校と呼んでいる。2010年には3,696校の自然学校が稼働中であることが報告されている³³⁾。一方で、自然学校の業務に従事する常勤スタッフがいない団体は全体（回答735団体）の20.8%を占め、常勤スタッフが5名以下の団体は全体の76.5%に達していることが報告されている。また、非常勤スタッフが3名以上いる団体は全体の42.5%、ボランティア導入率はNPO法人では62.2%、公益法人では59.6%と高い値を示している。このように組織キャンプを行う団体は大幅に増加したものの季節的な事業展開や専門性をもつ地域人材の活用、業務の特殊性や専門性などを理由に従事する常勤スタッフは少なく、多くの団体が非常勤スタッフやボランティアに支えられているのが現状である。

教育的なねらいのもと行われる組織キャンプにはキャンプディレクター、プログラムディレクター、マネジメントディレクター、キャンプカウンセラーまたはキャンプリーダーなどの指導者が存在し、効果的なキャンプを行う上で重要な役割を果たしている。特に、キャンプカウンセラーは大学生がボランティアとして携わる場合が多い。キャンプカウンセラーは参加者8～10名程度の小グループを担当し、参加者のキャンプ生活を援助したり、学びを促進する働きかけを行う。キャンプカウンセラーは参加者である子どもたちに最も近い存在であるためキャンプの目的を達成するにあたりその役割と責任は大きく、このような立場を通して指導者である大学生も多くの気づきを得て成長している。

これまでのキャンプ指導者を対象とした研究は、キャンプ指導者が有する特有の資質・能力^{12) 13) 14) 31) 36) 41)}、動機^{30) 35)}に着目した研究、指導者養成の効果に着目した研究^{28) 29)}、キャンプ指導経験の効果に着目した研究に大別することができよう。キャンプ指導経験の効果に関する研究の多くは大学生を対象とし

ており、研究内容は自然学校や子どもに対するイメージの変容に着目した研究^{20) 38)}と個人の成長に着目した研究に分類することができる。個人の成長に関する研究について、末原ら（2006）は大学生のキャンプスタッフ16名を対象に2泊3日のトレーニングキャンプと6泊7日の子どもキャンプの前後で自己概念を測定し、トレーニング前とキャンプ後に有意な向上がみられたことを報告している³⁴⁾。甲斐ら（2008）は大学生のキャンプ指導者10名を対象に6泊7日の子どもキャンプの事前と事後で自己成長性とリーダーシップ、ソシオグラムを測定し、キャンプカウンセラーの自己成長性の有意な向上とPM理論の集団維持機能に有意な向上がみられたことを報告している¹⁸⁾。石沢（2009）は短大生のキャンプカウンセラー48名を対象に3泊4日もしくは4泊5日の子どもキャンプの事前と事後で自尊感情と社会的スキルを測定し、いずれも体験群が対照群よりも有意に高い値を示したことを明らかにしている¹⁶⁾。徳岡（2012）は高校生のキャンプカウンセラー18名を対象に3泊4日のキャンプの事前と事後でキャンプカウンセラー自己成長感と自尊感情、社会的スキルを測定し、自己成長感の協調性にのみ高い効果量がみられたことを報告している⁴⁰⁾。

以上のことから、キャンプ指導経験の効果に関する研究の多くは大学生を対象として、自己概念や自己効力感、自尊感情といった個人に焦点を当てた変数、対人関係を円滑にする社会的スキルで効果がみられている。しかし、これまでの研究は1つのキャンプ事業を対象に2日から約1ヶ月といった短期間の指導経験の効果の検討に止まっている。実際、民間団体や施設の多くは大学1、2年次に募集をし、4年次まで経験を積み重ねるような組織が存在することを考えると、指導経験の量的な側面から検討する必要もある。大学生のキャンプ指導は基本的にはボランティアである

ため、活動年数や活動頻度は個々で大きく異なる。この指導経験の量の違いを検討することより指導経験を長期的あるいは多く経験することの効果を一層明らかにすることができると考える。

日本と同様に多くの大学生をキャンパススタッフとして採用しているアメリカでは¹⁾、ライフスキルやリーダーシップ、社会的スキル、アイデンティティ、対人関係などでポジティブな効果が報告されている^{3) 4) 32) 39)}。近年ではキャンパススタッフを確保することに苦労している団体が多く、団体とキャンパスカウンセラーの結びつきを示すエンゲージメントの研究も行われている^{5) 22)}。また、キャンパススタッフやカウンセラーを経験することが社会に出て役立つことを示す視点からコンピテンシーや労働力開発 (Workforce Development) の研究もみられ^{8) 17) 23)}、若者の体験の場としてキャンパスの指導体験が評価されていることがうかがえる。さらに、キャンパススタッフの経験が5年後、10年後、15年後にもポジティブな影響を示す研究が報告されている⁶⁾。

このようにアメリカの研究ではコンピテンシーや Workforce Development といった現代社会で必要とされる能力と関連付けた研究がみられる。

1.2. 大学生の体験活動の測定

Erikson (1959) はアイデンティティ理論の中で、青年期が社会の中での自分の役割や位置づけについての自覚を、様々な試行錯誤の中で見出していくとしている⁷⁾。青年期は学業だけでなく、クラブ活動やサークル活動、ボランティア活動、アルバイトなど自由に選択できる活動を通して試行錯誤しながら自己統制や社会に適応していく力を身につけており、それらの効果についても研究されている^{2) 37)}。

近年、我が国では現代社会で求められる能力として、文部科学省のキャリア教育の視点

から「基礎的・汎用的能力」²⁵⁾が、経済産業省からは「社会人基礎力」¹⁹⁾が、内閣府からは「人間力」²⁷⁾が、厚生労働省からは「就職基礎能力」²¹⁾などが示されている。これに関連して大学教育では、キャリア教育プログラムやインターンシップ、ボランティア活動などが積極的に取り入れられている。日潟ら (2008) は学生がこれらの体験活動することによって得られる能力のレビューを行い¹¹⁾、「ヒューマンコミュニティ創成マインド (以下、HC 創成マインドと略す)」の尺度を開発した²⁶⁾。HC 創成マインドは「チームを大切にする構え」を中核にする人や組織と協働していくために欠かせない資質・能力であり、コミュニケーション能力、リーダーシップ能力、ネゴシエーション能力、マネジメント能力、プランニング能力の5つの能力から捉えられている。

日潟ら (2010) は、この尺度を用いて大学院における実践活動や学術活動、委員会活動といった正課外活動が、他者を信頼・受容する姿勢およびコミュニケーション能力やリーダーシップ能力といった対社会に対する基本的な能力に影響している可能性を指摘している¹⁰⁾。また、松浦 (2018) は青少年教育施設における社会教育実習カリキュラムに参加した大学生13名を対象にHC 創成マインドを事前と事後で測定し、リーダーシップ能力、プランニング能力、ネゴシエーション能力、コミュニケーション能力が向上することを報告している²⁴⁾。及川ら (2013) は、青少年教育施設における2日から3日のボランティア養成研修に参加した118名を対象にHC 創成マインドを事前と事後で測定し、全ての能力で有意な向上がみられたことを報告している²⁹⁾。

以上のことから、HC 創成マインドは現代社会で求められる大学生の体験活動を基に作成されているため、この尺度を用いて大学生のキャンパス指導経験の効果を測定することは妥

当であると考え。団体や組織に所属する大学生のキャンプ指導者は、団体が掲げるキャンプの目的の達成に向けて、組織に関わる職員や学生らと協働する資質・能力が求められている。

1.3. 本研究の目的

本研究の目的は、複数の団体の大学生キャンプ指導者を対象に、キャンプ指導経験の量が HC 創成マインドに及ぼす影響を明らかにすることである。

2. 研究方法

2.1. 対象および手続き

大阪府キャンプ協会の団体会員のうち主に子どもを対象とした組織キャンプを実施し、大学生がキャンプカウンセラーとして指導している 7 団体の責任者に調査を依頼し、全ての団体から承諾が得られたため、これらの団体に所属する大学生のキャンプ指導者を対象とした。

対象となった団体は、キャンプ指導者の大学生を 1、2 年次に募集し、4 年次まで継続して活動することを求め、定期的に研修を実施していた。また、1 年次から 4 年次まで継続的に関わることから大学生の指導者は組織化され、その程度は各団体で幅があるものの、多くの団体が学年や経験を考慮した役割分担等がなされていた。中には上級生になるとキャンプの企画や運営を行う団体もあった。いずれの団体も交通費程度の支給はあるが、基本的には無給であった。

調査は、各団体で大学生が一斉に集合する研修等が行われた際に集合調査法にて行った。調査は 2014 年 9～11 月の期間で実施した。対象者は 362 名で、全員から調査の同意を得て、調査用紙の回収を行った。有効回答数は 351 件 (96.96%) であった。

2.2. 調査内容

調査は、性別、学年、活動年数、2013 年 6

月からの活動日数 (0 日、1～3 日、4～10 日、11～20 日、21～40 日、41 日以上の 6 件法) の属性の回答を求め、HC 創成マインドを測定する尺度として、森口ら (2009) が作成した「ヒューマンコミュニティ創成マインド評定尺度改訂版」を用いた²⁶⁾。尺度は、コミュニケーション能力、リーダーシップ能力、ネゴシエーション能力、マネジメント能力、プランニング能力の 5 つの因子からなる 27 項目で構成されている。回答は、「まったく当てはまらない」(1 点) から「よく当てはまる」(4 点) までの 4 段階で評価するよう求めた。

2.3. 分析方法

HC 創成マインドの得点の算出は、4 段階評価をそのまま得点とし合計得点を項目数で割り平均値を算出した。各因子の得点化も同様に平均値を算出した。

指導経験の量の比較は、活動年数と活動日数から経験多群と経験少群を定め、*t* 検定を行った。本研究の指導経験の量の比較は、活動年数と活動日数で多群と少群を定めたが、この調査期間中に対象者はキャンプ指導以外にもさまざまな活動を行い生活しているため、指導経験の量だけが統制されているわけではない。つまりキャンプ指導以外の日常生活の経験も含まれているため、純粋にキャンプ指導経験の量のみが比較されているわけではないことを念頭におき分析と考察を行った。

統計ソフトは IBM SPSS Statistics25 を使用し、全ての有意水準は 5% 以下とした。

3. 結果

有効回答者は男性が 135 名、女性が 227 名、学年は 1 年次が 104 名、2 年次が 106 名、3 年次が 96 名、4 年次が 56 名であった。活動年数は 1 年目が 112 名、2 年目が 106 名、3 年目が 88 名、4 年目が 45 名であった。活動日数は 2013 年 6 月からの活動日数の記載を求め、0 日が 4 名、1～3 日が 5 名、4～10 日が 41 名、

11～20 日が 48 名、21～40 日が 77 名、41 日以上が 176 名であった。

活動年数と活動日数で Pearson の相関係数を確認したところ、正の相関が認められた ($r = .492$, $p < .001$)。そこで、活動年数が 3 年目以上および活動日数が 21 日以上を経験多群 ($n=121$) として、活動年数が 2 年目以内および活動日数が 20 日以内を経験少群 ($n=86$) として HC 創成マインドの分析を行った (表-1)。ただし、活動日数は調査前までの約 1 年 4 カ月の期間であり、それ以前の活動状況の多寡は含まれていない。

指導経験の量の比較は表-2 に示す通り、HC 創成マインドの全体 ($t(205)=2.49$, $p < .05$) およびリーダーシップ能力 ($t(205)=2.73$, $p < .01$)、マネジメント能力 ($t(205)=3.21$, $p < .01$)、プランニング能力 ($t(205)=2.58$, $p < .05$) で有意差がみられた。ネゴシエーション能力 ($t(205)=0.90$, $n.s.$) とコミュニケーション能力 ($t(205)=-0.28$, $n.s.$) には有意差はみられなかった。

表-1. 活動年数と活動日数

活動年数	活動日数				合計
	0～10日	11～20日	21～40日	41日以上	
1年目	45	30	15	22	112
2年目	3	8	30	65	106
3年目	1	5	26	56	88
4年目	1	5	6	33	45
	50	48	77	176	351

表-2. 指導経験の量の検定結果

	経験多群 ($n=121$)		経験少群 ($n=86$)		t 値
	M	SD	M	SD	
HC創成マインド全体	2.94	0.41	2.80	0.38	2.49 *
リーダーシップ能力	2.86	0.54	2.65	0.53	2.73 **
マネジメント能力	3.24	0.47	3.03	0.44	3.21 **
プランニング能力	2.85	0.52	2.66	0.48	2.58 *
ネゴシエーション能力	2.98	0.48	2.92	0.44	0.90
コミュニケーション能力	2.63	0.56	2.66	0.55	-0.28

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 考察

4.1. HC 創成マインド全体

HC 創成マインド全体の得点は、経験少群と比較して経験多群に高い有意差がみられた。HC 創成マインドは「チームを大切に作る構え」を中核にする人や組織と協働していくために欠かせない資質・能力であり、これらの資質・能力は、キャンプ指導経験が豊富なほど身に付く可能性が示唆された。

大学生のサークル集団研究ではさまざまな階層があるためフォーマル集団とインフォーマル集団という概念が用いられる^{9) 37)}。組織化が強い程フォーマル性が高く、自由度が高い程インフォーマル性が高い。この概念を用いると、組織や団体に所属するキャンプ指導者は社会の組織や団体に所属するため大学のサークル活動と比較するとフォーマル性が高いと言える。これまでの研究からフォーマル性が高いほど組織内の役割分担や成員の責任の明確化が進むことや、集団目標の下で協働し、集団内で明確な役割分担がなされることでメンバーシップ感覚が強まることが指摘されている⁹⁾。また、大学生のキャンプ指導者は所属する団体の職員、参加者である子どもやその保護者といった様々な人たちと関わり、キャンプの企画や運営を行っている。さらに、状況が刻々と変化する自然という特殊な環境で活動を行う。このような人的にも環境的に

も特殊な場でのキャンプスタッフやキャンプカウンセラー経験が、HC 創成マインド全体の得点に影響したと考えられる。アメリカの研究においても、キャンプカウンセラーの地位は独特であるため、キャンプは成人期のアイデンティティ問題を検討するのに適した場であることが報告されている³²⁾。

一方で、本研究の指導経験の比較ではキャンプ指導以外の日常生活の経験も含まれていることから、キャンプ指導経験以外の日常生活において人や組織と協働する経験が本研究の結果に影響をしている可能性も示唆される。

4.2. リーダーシップ能力

リーダーシップ能力は、経験少群と比較して経験多群に高い有意差がみられた。この能力は、「集団で行動するときにみんなを引っ張っていくことができる」「メンバーに対して的確な指示が出せる」などの項目で構成されており、集団を統率し、指示をすることができる能力である²⁶⁾。

徳岡（2012）の研究ではキャンプカウンセラー経験者と非経験者を比較し、キャンプ・カウンセラー自己成長感尺度の「人をまとめる」「人に指示を出す」といった指導性因子が経験者の方が有意に高いことを報告している⁴⁰⁾。また、キャンプカウンセラー経験がリーダーシップスキルへ影響を及ぼしていることが明らかとなっている^{3) 18)}。キャンプカウンセラーは、周囲の環境や子どもたちの様子を見ながら、指示のタイミングや方法を判断し、グループをまとめていくことが求められることから、リーダーシップ能力が身に付くのではないかと考えられる。

4.3. マネジメント能力

マネジメント能力は、経験少群と比較して経験多群に高い有意差がみられた。この能力は、「相手の話を積極的に聞く姿勢をとることができる」「周囲の人や物事との関係を理解できる。」などの項目で構成されており、自分や

周りの状況を把握する能力である²⁶⁾。

指導経験を重ね、組織をまとめる立場になることで、客観的に物事を捉える力が身につくと考えられる。また、子どもたちと直接関わるキャンプカウンセラーには決められた関わり方やマニュアルが存在しないため、その瞬間の環境や人の状況を把握し、対応することが求められることから、マネジメント能力が身に付くのではないかと考えられる。

4.4. プランニング能力

プランニング能力は、経験少群と比較して経験多群に高い有意差がみられた。この能力は、「何かに取り組む際に、先を見通して計画を立てることができる」「取り組むべき課題を明確に分析している」などの項目で構成されており、情報を集め、課題を明確にし、その課題を克服するために計画を立てる能力である²⁶⁾。

徳岡（2012）の研究ではキャンプカウンセラー経験者と非経験者を比較し、キャンプ・カウンセラー自己成長感尺度の「先のことで考えて行動する」「多面的に考えられる」といった計画実行性因子が経験者の方が有意に高いことを報告している⁴⁰⁾。組織キャンプは自然環境の中で行われるため、プログラム立案の際には天候の急変など様々なリスクや参加者の状況を事前に想定して計画を立てる必要がある。また、キャンプカウンセラーは先読みして参加者へ指示をしたり行動しなければならない。このようなキャンプがもつ特殊な環境での活動によりプランニング能力が身に付くと考えられる。

4.5. ネゴシエーション能力

ネゴシエーション能力は、指導経験少群と経験多群を比較して有意差はみられなかった。この能力は、「相手と自分の意見が食い違った場合、相互に有益な妥協点を見出せる」「相手の要求を考えて、自分の提案を修正できる」などの項目で構成され、相手の意見を聞きな

がら自分の意見を述べ、双方によって有益な解決に向かうことができる能力である²⁶⁾。

日潟ら (2010) の正課外活動の研究においてもネゴシエーション能力に有意差はみられず、他者あるいは社会に対する高次の能力であることが影響していることを示唆している¹⁰⁾。一方で、松浦 (2018) や及川ら (2013) の研究では有意差はみられたことから^{24) 29)}、どのような経験が影響を及ぼすのかさらなる分析が必要である。

4.6. コミュニケーション能力

コミュニケーション能力は、経験少群と経験多群を比較して有意差はみられなかった。この能力は、「論理的に自分の考えを述べ、相手を納得させることができる」「相手が納得できるように話すことができる」などの項目で構成され、相手の話を適切に理解し、自分の意見をきちんと伝えることができる能力である²⁶⁾。

キャンプカウンセラーのソフトスキルの中には、コミュニケーションに関するスキルが見出されているが¹³⁾、本研究では指導経験により差はみられなかった。日潟ら (2010) の正課外活動の研究においてもコミュニケーション能力に有意差はみられず、こちらもネゴシエーション能力と同様に他者あるいは社会に対する高次の能力であることが影響していることを示唆している¹⁰⁾。一方で、松浦 (2018) や及川ら (2013) の研究では有意差はみられたことから^{24) 29)}、どのような経験が影響を及ぼすのかさらなる分析が必要である。

5. 結論

本研究は、大学生のキャンプ指導者を対象に、指導経験の量が HC 創成マインドに及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。主な結果は下記の通りである。

- 1) HC 創成マインド全体の得点は、指導経験少群よりも経験多群に高い有意差がみら

れた。

- 2) HC 創成マインドのリーダーシップ能力は、指導経験少群よりも経験多群に高い有意差がみられた。
- 3) HC 創成マインドのマネジメント能力は、指導経験少群よりも経験多群に高い有意差がみられた。
- 4) HC 創成マインドのプランニング能力は、指導経験少群よりも経験多群に高い有意差がみられた。
- 5) HC 創成マインドのネゴシエーション能力は、指導経験少群と経験多群に有意差はみられなかった。
- 6) HC 創成マインドのコミュニケーション能力は、指導経験少群と経験多群に有意差はみられなかった。

本研究から大学生のキャンプ指導経験は、指導経験が豊富なほど、リーダーシップ能力やマネジメント能力、プランニング能力に影響を与える可能性が示唆された。今回の指導経験の量の比較は統制に関して課題が残る手続きとなった。今後はより長期的にキャンプの指導経験が評価できるよう検討していきたい。

謝辞

本研究は 2014 年に大阪府キャンプ協会調査研究部会が実施した研究である。本研究にご協力頂きました皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) American Camp Association (2017) Staff Enrollment Report, https://www.acacamps.org/sites/default/files/resource_library/2017_Staff_RecruitmentReport.pdf, 2020 年 4 月 22 日参照.
- 2) 新井洋輔、松井豊 (2003) 大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向、筑

- 波大学心理学研究、26、95-105.
- 3) Barry A. Garst, Jeremy Johnson (2005) Adolescent Leadership Skill Development Through Residential 4-H Camp Counseling, Journal of Extension, [On-line], 43(5), Available at: <https://www.joe.org/joe/2005october/rb5.php>.
- 4) Barry A. Garst, Nancy K. Franz, Sarah Baughman, Chris Smith, Brian Peters (2009) "Growing Without Limitations:" Transformation Among Young Adult Camp Staff, Journal of Youth Development, 4(1), 21-34.
- 5) Dan McCole, Jeffrey Jacobs, Betsy Lindley, Leo McAvoy (2012) The relationship between seasonal employee retention and sense of community: The case of summer camp employment, Journal of Park and Recreation Administration, 30(2), 85-101.
- 6) Don DeGraaf, Jessie Glover (2003) Long-term impacts of working at an organized camp for seasonal staff, Journal of Park and Recreation Administration, 21(1), 1-20.
- 7) E. H. Erikson (1959、小此木訳 1973) 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル、誠信書房、東京.
- 8) Hannah K. Epley, Theresa M. Ferrari, Graham R. Cochran (2017) Development of a Competency Model for a State 4-H Camp Counselor Program, Journal of Park and Recreation Administration, 35(2), 51-73.
- 9) 橋本剛明、唐沢かおり、磯崎三喜年 (2010) 大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル：準組織的集団の観点からの検討、実験社会心理学研究、50 (1)、76-88.
- 10) 日潟淳子、森口竜平、小山田祐太、齋藤誠一、城仁士 (2010) 正課外活動によるヒューマンコミュニティ創成マインドの変化、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、4(1)、127-133.
- 11) 日潟淳子、谷芳恵、上長然、則定百合子、石本雄真、齋藤誠一、城仁士 (2008) 体験活動を通して個人がどのように変容するのかを測る尺度：これまでの関連研究レビュー、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、2(1)、143-147.
- 12) 土方圭 (2008) 児童を対象にした組織キャンプの指導に関する個人別態度構造分析—ベテラン指導者の行動傾向に着目した事例研究—、野外教育研究、12 (1)、13-26.
- 13) 土方圭、飯田稔 (2004) キャンプカウンセラーのソフトスキル評定尺度の開発、野外教育研究、7 (2)、23-34.
- 14) 土方圭、橘直隆、坂本昭裕 (2003) キャンプ参加児童・生徒のキャンプカウンセラーに対するパーソナリティ認知に関する研究、国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要、3、29-36.
- 15) 星野敏男 (2011) 第4章 野外教育と組織キャンプ、監修者 星野敏男、金子和正、野外教育の理論と実際、杏林書院、東京、35-43.
- 16) 石沢順子 (2009) 子どもキャンプにおけるカウンセラー経験が保育者養成校の学生に及ぼす影響(2) 自尊感情・社会的スキルの観点から、東京純心女子大学紀要、13、37-49.
- 17) Janel K. Digby, Theresa M. Ferrari (2007) Camp counseling and the development and transfer of workforce skills: The perspective of Ohio 4-H

- camp counselor alumni, *Journal of Youth Development*, 2(2), 103-122.
- 18) 甲斐知彦、鈴木博和、小井手桂祐、松本芳孝、今井正裕 (2008) キャンプリーダー体験が青年リーダーに与える影響 : 平成19年度文部科学省委託事業セブンデイズキャンプ in 能勢 2007 から、*スポーツ科学・健康科学研究*、11、11-18.
 - 19) 経済産業省・社会人基礎力に関する研究会 (2006) 社会人基礎力に関する研究会ー「中間とりまとめ」ー.
 - 20) 近藤剛 (2012) 短期キャンプの指導体験が大学生ボランティアの子どもイメージに及ぼす影響、*鳥取短期大学研究紀要*、65、17-26.
 - 21) 厚生労働省 (2004) 「若年者の就職能力に関する実態調査」結果.
 - 22) Laurie P. Browne, Melissa D' Eloia (2016) Toward a model of camp staff engagement: A look at university-based day camps. *Journal of Park and Recreation Administration*, 34(4), 5-19.
 - 23) Mat D. Duerden, Peter Witt, Barry Garst, Deb Bialeschki, Tori Schwarzlose, Kara Norton (2014) The Impact of Camp Employment on the Workforce Development of Emerging Adults, *Journal of Park and Recreation Administration*, 32(1), 26-44.
 - 24) 松浦賢一 (2018) 青少年教育施設における社会教育実習カリキュラムの開発研究ー国立大雪青少年交流の家における実践からー、*創大教育研究*、27、65-75.
 - 25) 文部科学省中央教育審議会 (2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について(答申).
 - 26) 森口竜平、日潟淳子、小山田祐太、齊藤誠一、城仁士 (2009) ヒューマンコミュニティ創成マインド評価尺度改訂版の開発、*神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*、3(1)、87-91.
 - 27) 内閣府・人間力戦略研究会 (2003) 人間力戦略研究会報告書.
 - 28) 及川未希生、庄子佳吾 (2018) 青少年教育施設におけるボランティア育成に関する研究 : 性格特性と社会人基礎力の変容に着目して、*青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要*、6、24-33.
 - 29) 及川未希生、庄子佳吾、志賀亮太 (2013) 国立青少年教育振興機構におけるボランティア養成に関する研究 : ヒューマンコミュニティ創成マインドに着目して、*独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要*、2、115-124.
 - 30) 齋藤雄、伊原久美子、稲松謙太郎、濱谷弘志、花房貴子、福水さやか、中川もも、岡村泰斗 (2004) 自然体験活動指導者を志す動機について、*キャンプ研究*、8 (1)、23-28.
 - 31) 坂本昭裕、遠藤卓郎、橘直隆、多田聡 (1997) キャンプ活動場面における指導者の状況認知構造ー状況の分類と認知次元の検討からー、*野外教育研究*、1 (1)、45-55.
 - 32) Sara K. Johnson, Jane A. Goldman, Anita I. Garey, Preston A. Britner, and Shannon E. Weaver (2011) Emerging adults' identity exploration: Illustrations from inside the "camp bubble." *Journal of Adolescent Research*, 26(2), 258-295.
 - 33) 自然学校全国調査委員会 (2011) 第5回自然学校全国調査2010調査報告書、公益社団法人 日本環境教育フォーラム.
 - 34) 末原美佐、柳敏晴、千足耕一 (2006) キャンプにおけるボランティアトレーニング効果、*鹿屋体育大学学術研究紀要*、34、

41-48.

- 35) 杉本守 (2019) 国立青少年教育施設でボランティア活動を行う高校生・短期大学生・大学生の参加動機に関する研究、青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要、7、72-81.
- 36) 多田聡、飯田稔 (1998) キャンプカウンセラーの勢力とその源泉、野外教育研究、1 (2)、1-11.
- 37) 高田治樹 (2018) 大学生サークル集団における行事活動の心理的成果の探索的検討、青年心理学研究、29(2)、71-89.
- 38) 田中利明、矢部京之助 (2006) 自然学校における指導補助員の教育効果について、野外教育研究、10(1)、49-58.
- 39) Theresa M. Ferrari, Niki Nestor McNeely (2007) Positive youth development: What's camp counseling got to do with it? Findings from a study of Ohio's 4-H camp counselors, Journal of Extension [On-line], 45(2), Available at:<https://www.joe.org/joe/2007april/rb7.php>.
- 40) 徳岡大 (2012) キャンプ・カウンセラー経験のキャンプ・カウンセラー自己成長感への影響、野外教育研究、15(2)、21-33.
- 41) 富田有紀、飯田稔、井村仁、橘直隆 (2002) キャンプ参加児童から見たキャンプカウンセラーの魅力の検討、野外教育研究、5 (2)、23-33.

實踐報告

コンピテンシーとキャンプ

ーデイキャンプを通してコンピテンシーは育成できるかー

Camps and competency

-Will Competencies Grow Through Day Camps? -

渡邊 尊斗(帝京大学) 倉品 康夫(帝京大学)

Mikoto WATANABE(Teikyo University)

Yasuo KURASHINA(Teikyo University)

1. はじめに

1-1 コンピテンシーとは

コンピテンシーとは知識だけではなく、スキル、さらに態度を含んだ人間の全体的な資質・能力概念である。このコンピテンシーの育成は多くの国で課題になっている。国は社会の変化に対応して、子どもたちが将来、幸せに、意義ある人生を生きるために必要な力としてコンピテンシーを課題認識し、資質・能力を育成する教育課程を追求してきた。

コンピテンシーの定義¹⁾について、経済協力開発機構（OECD）の下部組織であり、コンピテンシーを国際的、学際的かつ政策指向的に研究する DeSeCo プロジェクトは次のように定めている。

多様性が増した複雑な社会に適合するための能力概念であり、1「相互作用的に道具を用いる力」、2「異質な集団で交流する力」、3「自律的に活動する力」という 3 つの力で構成される。

1「相互作用的に道具を用いる力」とは①「分かっていることを認知する力」②「適切な情報源を特定しアクセスする力」、③「その情

報の質、適切さ、価値を評価する力」、④「知識と情報を整理する力」に分けることができる。

2「異質な集団で交流する力」とは①「自分のアイデアを出し、他者のアイデアに耳を傾ける力」、②「討議の力関係を理解し、基本方針に従う力」、③「戦略的、あるいは持続可能な協力関係を構築する力」、④「交渉する力」、⑤「異なる意見を受け入れ、その上で意思決定する力」に分けることができる。

3「自律的に活動する力」とは人生の意義や目的を明確にし、計画性とストーリーのある人生を生きる力のことである。現在の変化、複雑性、相互依存を前提とした社会において、変化を楽しむ余裕を持って、心境を遷移させつつ、成長を見出して、自律的に幸福な人生を生きる力が求められている。

1-2 活動の趣旨

キャンプを通して育まれるコンピテンシーについて、倉品²⁾は 5 泊 6 日の W 大学のキャンプにおいて、キャンプ後の変化、変容について検証し、野外活動ハイパフォーマーと対

照群との比較から、余暇享受能力のキーコンピテンシーについて考察を行い、一部、変容を認めている。

そこで、今回の T 大学のキャンプにおいて、経験や体験によって感じたことについて参加者に記述を求め、集計した結果を 3 つの価値観に分けたうえで、教育学的観点からキャンプ活動とコンピテンシーの構造の関連について述べる。

1-3 活動の概要

T 大学のキャンプの構成は、全 12 回計画されたなかから 3 回分を参加者が選んで実習を行うものであった。

なお、2 回は小野路キャンプ場での実習、1 回は高尾山登山になるよう指示があった。

実習日は、小野路キャンプ場は 6/26、6/27、7/4、7/10、7/11、7/17、7/24、7/25、高尾山登山は 7/3、7/10、7/18、7/31 で、いずれの日程もデイキャンプであった。

キャンプ終了後には実習に関する評価について、自由記述で提出を求めた。内容についてはキャンプ活動とコンピテンシー構造の関連について調査するため、キャンプを実施するうえで基本となる装備、生活技術に関する項目と、意思や心境の変容を検証するための項目を組み込んだ下記 4 つのテーマをすべて含んだものとした。

- 1) キャンプ前と後における持ち物の準備に対する感覚の変化（キャンプ用にそろえた道具に対する印象が、価格や安全性、環境への影響、キャンプ以外での用途の有無などを踏まえて、キャンプ前とキャンプ後でどのように変化したか）。
- 2) キャンプでの調理のおすすめ（作りやすさやおいしさなどの理由をつける）。
- 3) キャンプ自体の面白さはどんなところだといえるか、体験を含めて記述。
- 4) 次回もキャンプに参加したいと思うか、また

参加するとしたらどのような点に気を付けて道具をそろえたいか、その理由も含めて記述。記述から読み取れる変化は、大きく分けて 3 つであった。

- ① 持ち物の量やコストに対する意識
- ② 日常生活では気づけない自然のありがたみ
- ③ 活動から気づく仲間とのコミュニケーションの大切さ

2. 対象

T 大学の学生 1 年生から 3 年生計 16 名

3. プログラムの内容

A. 野外生活技術

火起こし、ロープワーク、装備・服装、ハイキングテクニック、ナビゲーション。

B. ハイク

B-1 小野路キャンプ場

キャンプ場までの約 3 km 道を歩く。起伏があり、地面はぬかるんだ道となっている。

B-2 高尾山ハイク

高尾山にある病院の裏から琵琶滝に向かって進むコース。起伏があり、岩がむき出しで滑りやすい。

C. 冒険プログラム

シャワークライミング。崖や傾斜地を登り、木にロープを結んで降りてくる活動。

D. 野外食育プログラム

スーパーで購入した食材と直売所の食材を使つての食事作り。時計型薪ストーブをコンロとして使用し、火起こしを行う。

4. 指導体制

キャンプ参加者の全員がリーダーを経験する 1 日責任リーダー輪番制を用いた。インストラクターは参与的な観察レベルで常に全体を俯瞰してリスクチェックを行った。

5. プログラムの流れ

5-1 小野路キャンプ場

朝 9 時にバス停に集合し、リーダー、記録係、保険係、会計係の 4 つの役割分担を行った。

役割を設定後、会計係が食材を購入するため、1 人あたり 400 円を集金。バス停にある食料品店にて食材を調達することとした。購入の際は各参加者がキャンプ場の環境や調理の過程を想像し、意見を出し合いながら品物を決定した。

食材の調達後は里山のふもとまではバスで移動し、10 時頃にふもとに到着。そこから適宜休憩を取りつつ、キャンプ場までの道を 1 時間半ほどかけてハイクした。ハイク中は里山の景色を堪能したり牛舎の近くを通ったりしつつ会話を交わし、参加者同士の関係性を深めた。

キャンプ場に到着後、参加者たちは前回参加したインストラクター役の履修生から焚火、休憩場所、食事の 3 つを作ることと指示を受け、それぞれどのように役割分担をするか考えながら行動した。

役割を入れ替えたり互いの知識を伝えあったりしながら、3 つの指示をおよそ 1 時間半かけて行った。

食事時間を 1 時間ほど設け、里山のハイクやキャンプ場での活動の評価を共有した。

食事を終えた後はロープワークを学び、それを応用して崖登りや竹林の間伐作業を 1 時間ほど行った。間伐した竹は後日の高尾山ハイクで使う杖とした。

最後に、キャンプ場の片づけを 1 時間ほどかけて行った。休憩場所の片づけや食器等を環境に配慮して清潔にすることなども、参加者が知恵を絞りながら進めていった。

撤収後はキャンプ場から徒歩 10 分ほどのバス停でバスに乗り、この日の評価を共有して終えた。

5-2 高尾山ハイク

9 時に高尾山口駅に集合し、リーダー、記録係、保険係、会計係の 4 つの役割分担を行った。

近くのコンビニエンスストアで食料を購入した。

高尾山の麓にある 599 ミュージアムで地図を入手し、経路を確認しながら登山を開始。

傾斜が急な道のりは適宜休憩をはさみながらハイクを続けた。

途中、水分補給とクッカーの使い方を確認するため、お湯を沸かしてお茶をいれた。

山頂に着き、火を起こしてクッカーでインスタントの食品を温めて食べた。

下山の途中で川に立ち寄り、シャワークライミングを行った。

下山後はバスに乗り高尾駅に向かい、参加者たちでこの日の振り返りを行い終了した。

6. 提出された記述の内容

6-1 持ち物の量やコストに対する意識

自由記述の中に、持ち物の量やコストに対する意識についての記述が見られた。キャンプに対する最初のイメージとして「たくさんの荷物」「できるだけ多く、大きく」「万全の装備」「高くて安全な物」と書いている人が多く見られた。しかし、キャンプ後には持ち物の準備に対して感覚の変化が起き、「動きやすい格好」「重すぎない荷物」と書いている人が多く見られた。

他には「値段相応で安価な物」、「全てをそろえるのではなく、必要なものを必要な分だけ」、「手軽で便利、安いもの」というコストについての言葉も多く見られた。

またキャンプ用品を取捨選択していくなかで、「水の確保」を多くの人が挙げていた。これはキャンプ中に熱中症になりかけたり、脱水症状に近い状態に陥ったりしたことが原因であった。グループでの行動で周りの参加者

が予備の水を持っていたため大事には至らなかったが、このような経験からどうしても削ることのできないものとしての共通認識が生まれた。

靴については安価な地下足袋と登山靴とで意見が割れた。

なお、運動靴に関してはインストラクター役の履修生に不適と指摘され、実際に履いていた参加者から「滑りやすい」、「転倒した」などの意見があったことから今回は除外した。

地下足袋について、利点はとにかく軽く、足にフィットして足全体を自由に動かすことができる場所である。記述では「普段の靴と違い、足の裏からの刺激を良く感じられるため感覚が研ぎ澄まされる」、「人間本来のパフォーマンスを最大限に発揮できると感じられる」などが挙がっていた。安価で入手でき、足首まで覆われる。水たまりでは浸水してしまうデメリットはあるが、川などの中でも足との一体感からほかの靴より滑りにくく感じ、速乾性にも優れているため不快感は少ない。クッション性に欠けるため疲れやすいことと、普段使用するにはファッション的に場面がないことが難点と思われる。

登山靴は舗装されていない道を歩くために作られたものであり、足全体を守る構造になっている。足首を固定できるため疲れにくく防水機能が施されているため足元が濡れてしまうことを防げる。また事前にどのような場所に行くか計画を立てている場合、岩山や傾斜など赴く場所によって靴を選ぶことができるため、その都度環境に適した靴を履き、安全にキャンプを行うことができる。災害等危険な状態の時に安全靴のように足を守ってくれる。しかし値段は地下足袋に比べて高く、低価格帯でも五千円から一万円前後してしまう。記述では「疲れにくい」、「非常時にも活用できるため持っていて損はない」ということが挙がっていた。

6-2 日常生活では気づけない自然のありがたみ

記述の中では「非日常的な体験」、「何物にも囚われずに活動できる場所」に「楽しさ」や「達成感を得る」と挙げている人が見られた。また自然の中で活動を行うことで「日々の忙しさ」から解放されることと同時に「普段の日常生活が便利」であり、「特に困ることなく生活できている」ことに気づいたという記述も多く見られた。

6-3 活動から気づく仲間とのコミュニケーションの大切さ

野外食育プログラムと冒険プログラムを通して人とのつながりが大切だと書いていた参加者が多く見られた。

野外食育プログラムでは作る物を自分たちで考え、調理することになっていた。参加者の記述から、このプログラムでは「おいしいものが食べたい」という気持ちと「簡単に調理を済ませたい」という気持ちが共通していた。そしてその思いを達成するために役割分担を行ったり自身の経験を活かしたりして食事を作っていた。この役割分担があったおかげでその後の意思疎通も取りやすくなった。活動中にはストーブへの薪のくべ方や野菜の切り方、味付けの方法など参加者それぞれの得意分野についてアドバイスしあいながら調理を進めていった。食事の席ではコミュニケーションが盛んな様子が見受けられた。

冒険プログラムの傾斜登りとシャワークライミングでは、どちらの活動でも参加者が主体となり、助け合いながら活動を行っていった。特に何回かの試行錯誤から、自らの体の動きを客観的に分析できた履修生は周りの履修生に、「こうやると上手くできるよ」と、伝えあっていた。

アドバイスをしあうなどの相互のコミュニケーションが盛んに行われており、この活動

後の参加者同士の仲も深まった。

キャンプの良いところとして、「苦労話」や「話を共有できる」ことなどが挙がっていた。話を共有できる仲間が大切だとキャンプを通して実感していたと思われる。また「不便」と感じたときに、それを乗り越えるために仲間と協力することがコミュニケーションを盛んにさせ、つながりが大切だと感じさせる要因にもなっていたと推察される。

7. コンピテンシーとの関連

7-1 相互作用的に道具を用いる力

相互的に道具を用いる力は、①「分かっていることを認知する力」、②「適切な情報源を特定しアクセスする力」、③「その情報の質、適切さ、価値を評価する力」、④「知識と情報を整理する力」に分かれている。今回のキャンプでは主に④「知識と情報を整理する力」について変化が見られたのではないかと考えられる。

「知識と情報を整理する力」は6-1の「持ち物の量やコストに対する意識」の変化から読み取れた。キャンプ前の事前の知識や情報と実際にキャンプ地に行き得た知識や情報を整理して、次のキャンプで使うものを選ぶことを行っていたからだ。また参加者との交流中に互いの知らない情報を共有しあい、調べたり聞き直したりしながら調理などの実践に移している場面も見られた。冒険プログラムでの行動の変容も、参加者が自らの体の動きを客観的に分析して伝えるなど、自らに備わっている知識を整理して伝えるといった場面から変化を読み取ることもできた。

7-2 異質な集団で交流する力

異質な集団で交流する力は、①「自分のアイデアを出し、他者のアイデアに耳を傾ける力」、②「討議の力関係を理解し、基本方針に従う力」、③「戦略的、あるいは持続可能な協

力関係を構築する力」、④「交渉する力」、⑤「異なる意見を受け入れ、その上で意思決定する力」に分かれている。これらはすべての力に変容が見られたのではないかと考えられる。

6-3の「活動から気づく仲間とのコミュニケーションの大切さ」に書かれていた記述から読み取れる。役割分担を行いながら調理や調理方法を検討したほか、活動として火起こし、休憩所作り、調理を同時進行したため、それらの作業効率を上げるための役割分担や相互にアドバイスしあう環境が影響を与えたと考えられる。

7-3 自律的に活動する力

「自律的に活動する力」は人生の意義や目的を明確にし、計画性とストーリーのある人生を生きる力のことであった。

6-1の「持ち物の量やコストに対する意識」のなかの、キャンプへの持ち物の意識が、その時のキャンプをこなすためという考えから今後のキャンプも含めて楽しむというような感覚の変容から読み取れる。最初のイメージとしての「たくさんの荷物」や「万全の装備」からはその日のキャンプを終えることに焦点が絞られており、今後の活動や余暇としての感覚とは遠いと考えられる。しかしキャンプ後に挙げた「動きやすい格好」「重すぎない荷物」「値段相応で安価な物」という言葉は、個人がキャンプという活動を継続的に楽しもうとする意識から出てきたのではないかと考えられる。また6-2の「日常生活では気づけない自然のありがたみ」では自然と触れ合う良さについて書かれている。今後の社会の持続可能性を考える上でも必要な観点になると推察される。

8. まとめ

これらのことからキャンプでの経験は今の時代に求められているコンピテンシーの育成に役立ち、特に個人の心理面に大きく影響するものだと考えられる。キャンプ中に自己決定を繰り返すこと、試行錯誤を重ねてキャンプを作り上げること、仲間と協力して物事を達成することは参加者に自信を与えることになり、コンピテンシーの育成につながると考えられる。

今後の課題としては具体的な活動計画で行うことがよりコンピテンシーの育成に役立っているのかを探ることだと考えられる。

参考文献

- 1) 今西幸蔵 (2008) キー・コンピテンシーとDeSeCo 計画、学校教育研究
- 2) 倉品康夫 (2008) 野外の活動及びレジャーの余暇享受能力の構造について - 享受能力のキー・コンピテンシーに着目して - 、東京体育学研究

資 料

公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」投稿規程

【投稿資格】

1. 投稿の執筆者は、筆頭および共同ともに、公益社団法人日本キャンプ協会（以下、「本会」という）の会員に限る。ただし、本会が執筆を依頼する場合は、この限りではない。

【投稿原稿】

2. 投稿原稿の条件は、以下の通りとする。
 - (1) 投稿原稿の内容は、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等を対象としたものであること。
 - (2) 投稿原稿は、原則として未発表ものに限る。ただし、以下のものについては、初出を明記することで未発表のものとしなす。
 - 1) 各種学会等において発表要旨集等に掲載されたもの。
 - 2) シンポジウム、研究集会、講演会等で資料等として発表されたもの。
 - 3) 国、自治体、業界、団体等からの委託による調査研究報告書等に収録されたもの。
 - 4) その他、本会が特に認めたもの。

【投稿原稿の区分】

3. 本誌の投稿原稿の区分は、研究論文、実践報告とする。
 - (1) 研究論文は、論文としての内容と体裁を整えており、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等において新たな知見をもたらすもの。
 - (2) 実践報告は、実際に行われたキャンプ等に関する報告であり、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要を示し、新たな取り組みや課題等が十分に整理され、今後のキャンプにおいて有益な示唆を与えるもの。

【執筆要項】

4. 執筆に関する細則については、以下の通りとする。
 - (1) 体裁は、A4 版タテ用紙を使用し、必ずワードプロセッサ等で作成する。
 - (2) 原稿の長さは、本文・図表・写真・引用文献を含めて、研究論文は12 頁以内（1 頁1,600 字以内）、実践報告は8 頁以内を原則とする。
 - (3) 文体は、「である」調とし、文字は、現代仮名遣いを基本とする。句読点は、「、」および「。」を用いる。
 - (4) 氏名と所属は、和文および英文の双方を明記する。表題は、原稿の内容を端的に示すもので、和文および英文の双方を明記する。
 - (5) 要旨（200 語以上300 語以内）とキーワード（5 語以内）は、研究論文のみ、英文の記載をする。
 - (6) 引用文献は、本文最後に著者名のアルファベット順で一括して、一連番号をつけて記載する。本文の引用箇所には、該当する文献番号を肩字「例¹⁾」で示す。以下に、引用文献の記載例を示す。

（記載例）

雑誌の場合：著者名（発表年）題目、雑誌名、発行所、巻（号）、所在ページ

野外一郎（2010）キャンプの教育的効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、3(2)、101-112

書籍（単著）の場合：著者名（出版年）書名、発行所、所在ページ

野外次郎（2010）キャンプ教育、キャンプ教育研究社、30-40

書籍（共著等）の場合：著者名（出版年）章の題目、編者名、書名、発行所、所在ページ

野外三郎（2010）野外生活技術、野外一郎（編）、キャンプ総論、キャンプ教育研究社、25-28

【投稿原稿の採否】

5. 投稿原稿は、以下の掲載の採択を受けるものとする。

- (1) 研究論文の掲載の採択は、本会が委嘱する査読者2 名が行う。審査の手続きは、以下の通りである。
 - 1) 研究論文の体裁に関して、本会が確認を行う。必要に応じて投稿者に修正を求める。
 - 2) 各査読者による審査結果は、次の4 つのいずれかで報告され、投稿者あてに意見が付される。
 - A：そのまま掲載可能
 - B：一部修正すれば掲載可能
 - C：大幅に修正可能ならば掲載可能
 - D：掲載不可
 - 3) 2 名の査読者の審査結果が、共に「D」の場合は、掲載不可とする。
 - 4) 上記3) に当てはまらない場合のみ、2 名の査読者の審査結果が、「A」の段階に至るまで、投稿者とやりとりを行う。ただし、査読者が相応と考える修正や補足等が3 回までに満たされなかった場合は不採択とする。
- (2) 実践報告の査読審査は行わない。ただし、不適切な表現や内容がある場合は、当該事務局が適宜助言し、投稿者が加筆修正を行った上で、掲載可能とする。
- (3) 修正を要する研究論文や実践報告は、当該事務局が設定した締切までに再提出することとし、それを越える場合は取り下げたものとみなす。

【原稿の権利】

6. 本誌に掲載された研究論文や実践報告の著作権（「複製権」、「公衆通信権」、「翻訳権、翻案権」および「二次的著作物の利用権」を含む）は、本会に帰属するものとする。ただし、内容に関する責任は、当該研究論文や実践報告の著者が負うものとする。

【投稿方法】

7. 投稿に関する細則は、以下の通りとする。

- (1) 投稿原稿の電子ファイルを、Word等のテキスト形式とPDFで提出する。また、別紙の「キャンプ研究投稿連絡票」に必要事項を記入し、併せて提出する。尚、データを郵送で提出した場合、掲載の採否に関わらず、原則として返却しない。
- (2) 掲載料は、研究論文および実践報告ともに5,000 円（税込）とし、掲載確定後、すみやかに納入するものとする。

投稿原稿の送付先・問い合わせ先

〒151-0052

東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内

公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」編集事務局

電話 03-3469-0217 ファックス 03-3469-0504

E-mail ncj@camping.or.jp

掲載料の振込口座

郵便振替口座 00190-3-34031

加入者名 公益社団法人日本キャンプ協会

*通信欄に「キャンプ研究掲載料等」と記載すること

◆「キャンプ研究」収録題目一覧

■第1巻（1997/12/20）

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察 ●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務

[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告 ●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告 ●不登校の子ども達の暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

■第2巻（1998/7/20）

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創

[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する

[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

■第3巻第1号（1999/6/30）

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育“水辺活動”実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼吸ゲームの実践

■第3巻第2号（1999/12/25）

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム ●思春期女子キャンパーの理解と援助

[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分にあげざり影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学びの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

■第4巻第1号（2000/7/26）

[実践報告] ●'99 無人島キャンプin 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターぼちぼちハウス リフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●フィットネスクラブを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

■第4巻第2号（2001/2/28）

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプin 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプin いけだ

[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

■第5巻第1号（2001/6/30）

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象にした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代 やさしさ発見！びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプin 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾－新しいコンセプトを持ったシルバーキャンプのこころみー

[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

■第5巻第2号（2002/1/31）

[実践報告] ●アドベンチャーin 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンパク大学の幼児キャンプ ●“共育”活動としての幼少児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉YMCA LD 児等キャンプ～つばさグループキャンプ～

[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

■第6巻第1号（2002/11/11）

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ－馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討－ ●人と人 つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプin 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通しての人とのかかわり 第1回 ハッピーウィリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプin 鷺敷キャンプ場 川内学童クラブ 鷺敷キャンプ場での試み

■第6巻第2号 (2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発ー港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試みー ●カップ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ

[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

■第7巻第1号 (2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用 ●親子いきいきリフレッシュキャンプー事業中止から学ぶことー ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけー「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践からー

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号 (2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発ー湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試みー ●子どもと共に創るキャンプ(I)ー白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践からー ●子どもと共に創るキャンプ(II)ー白川小学校・三重大学による合同キャンプin 石水溪の実践からー

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間ーわんぱくこども宿(10泊11日)に着目してー ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究ー国立室戸少年自然の家主催事業「日本版School Water Wise」に着目してー ●キャンプ実習における状態不安に関する研究ー係の役割に着目してー

■第8巻第1号 (2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプin ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラムーWilderness Education Association を事例としてー

■第8巻第2号 (2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手のoff the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号 (2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(III)ー白川小学校・三重大学合同キャンプの実践からー ●自閉症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

■第9巻第2号 (2006/1/30)

[実践報告] ●岡山YMCA ファミリーキャンプの実践報告ー信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざしてー ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号 (2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006 ー第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義ー小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプー野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後に及ぼす影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入したASE が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふぉーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプin むろと実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分面に及ぼす影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告

[ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告ー4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号 (2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告ーチャレンジ2702☆事業の試みからー ●ユニバーサルキャンプ 2005 in むろと

[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び ●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第10巻第3号 (2007/3/30)

[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初のWEA 野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第11巻第1号 (2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007ー第11回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●2007年は日本の組織キャンプ100周年か? ●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ●最近5年間における野外教育研究の傾向 ●2007ACA National Conference 参加報告 ●日本キャンプ協会国際交流委員会の働きーAOCF 創立ー ●“WILDERNESS FIRST RESPONDER” 野外救急法資格取得コース ●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ●看護専門学校での授業として行うキャンプにおける学生の学び ●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ●ユニバーサルキャンプ2006実施報告

[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおけるSignificant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ●組織キャンプの魅力に関する研究ー花山キャンプを事例としてー ●中学校における教科と自然体験活動の関連について ●キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ●キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的変化と自己評価 ●サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプー10年の軌跡ー

■第11巻第2号 (2007/9/30)

[実践報告] ●あさお冒険クラブの仲間づくりとエコ・キャンプをめざしてー野外活動を通して気づくことー

[研究資料] ●キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ●障害者キャンプにおけるバリアの研究ー身体障害者模擬患者を通してー ●キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第11巻第3号 (2008/1/30)

[特集] ●不揃いの麦から作るビールの味には深みがある

[実践報告] ●キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援についてー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー

[研究資料] ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響

[報告] ●第11回日本キャンプ会議全体会報告ーみんなでつくるあしたのキャンプ(キャンプ場編)ー

■第12巻第1号 (2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008ー第12回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ●民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメン

トに関する将来予測研究 ●キャンプ参加費に関する保護者の意識 ●米国サマーキャンプの日課活動(実修)について

ーメイン州、キャンプ・オーアトカの場合ー ●知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ●ガンバレ! 能登 震災支援キャンプ報告 ●冬の陣と雪の吟ー「雪のスゴイ!」を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ2008 ●ばるばるキッズ2007 実践報告 ●日本の野外活動に対する中国の(小学ー大学)男女学生の認知度 ●「社会力」を育成する教育プログラムの開発ープロジェクトアドベンチャーの手法を応用してー ●連想法を用いたキャンプの効果測定の試み ●新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ●ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告ー他団体との連携と運営のポイントに着目してー ●『若者自立支援事業「本当にやりたい! ことプロジェクト」実践報告』 ●サントリー・神戸YMCA 共同プロジェクトー余島プロジェクトー ●「読書」による観想的キャンプ生活ー中村春二口訳「方丈記」の野外教育の価値に注目してー

[ポスター発表] ●利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ●地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ●自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けてーキャンプが青少年の成長に及ぼす効果ー ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けてープログラムと自然・生活環境に着目してー ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けてー参加者と指導者に着目してー

■第12巻第2号 (2008/9/30)

[実践報告] ●幼児キャンプの実践 ●キャンプを通じた地域づくりの試み「あしがらシニアキャンプ」

■第12巻第3号 (2009/1/31)

[実践報告] ●子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識—不満足評価の視点に着目して—

[報告] ●キャンプディレクター2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ●第12 回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ (指導者編) ～

■第13巻第1号 (2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 —第13回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割—米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラム— ●病気とたたかう子どもたちに夢のキャンプを—医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぷちキッズキャンプの取り組み— ●休止スキー場を活用したキャンプの試み—白山市アドベンチャーキャンプの実践から— ●指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ●組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ●ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ●中国における野外専門運動基地の現状—天津市山野運動基地— ●実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ●教員・保育者をめざす女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ●活動の質を高めるチャレンジとリラクソスの落差の追求—日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法— ●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える (1) ●体験がもたらす教育的効果 ●幼児とその保護者における自然体験の現状—子どもの育つ環境による自然体験の違い— [ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試み—スケートキャンプの実践報告— ●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査— 1年目結果報告— ●Means-End Analysis を用いたキャンプ効果の要因の検討 ●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8 年間の経緯と継続上の課題 ●小学校長期自然体験活動の効果とその要因—鹿沼市自然体験交流センターを事例として— ●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

■第13巻第2号 (2009/11/30)

[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～ 2009 年全米キャンプ会議に参加して～

[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察

[報告] ●第13回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ (安全管理編) ～

■第14巻第1号 (2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010 —第14回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ●ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ●G.N.C.A. スプリングキャンプ『ドリームキャンプ』報告 ●JALT プログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響 ●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違い—つながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察— ●発達段階に応じたキャンプ効果の比較—メタ分析を用いて— ●キャンプにおける場の力—ウィルダネス体験に着目して— ●日米交流サマーキャンプ20 年の歩み—その1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試み—ツリーハウスづくりの取り組みから—なぜバックカントリースキーを求めるのか—バックカントリースキーへの移行に注目して— ●地域活性化に貢献するキャンププログラムに関する研究—コンジョイント分析の適用— ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について [ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討—「アイガモを食べる」体験プログラムの効果測定— ●日米交流サマーキャンプ20 年の歩み—その2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果— 2 ヶ年調査結果の分析— ●ウェビング・テープを使ったチームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ2009 効果測定調査報告 ●体験型親プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会100 年の歴史

■第14巻第2号 (2011/1/30)

[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハット」調査—その後を生かせる対応策とは— ●公園での野外教育実践—プレーパーク活動を通して— ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開

[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究—山梨県の市営キャンプ場を例として—

[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する研究 ●専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

■第15巻 (2012/1/31)

[特集] ●子ども達の悲しみを支えるということーグリーフキャンプの試みにむけてー ●東日本大震災の被災者を対象とするグリーフキャンプの取り組み
 [実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題 ●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状 ●Hole in the Wall Camps ～病児キャンプの世界的ネットワーク～

■第16巻 (2013/3/10)

[研究論文] ●キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性
 [実践報告] ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題ー第2報ー

■第17巻 (2014/3/10)

[研究論文] ●雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究
 [実践報告] ●南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性 ●父子キャンプ(パパチルキャンプ)の実践 ●「災害に備える」野外力をきたえようーアウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

■第18巻 (2015/2/15)

[研究論文] ●大切な人を亡くした子どものグリーフキャンプの実態とその効果に関する文献レビュー ●キャンプ体験が被災地児童のメンタルヘルスと生きる力に及ぼす影響 ●ハンディ気象計による気象リスクマネジメントの可能性ートムラウシ山遭難事故(2009) 報告書よりー ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析
 [実践報告] ●Frost Valley YMCA の価値教育 ●自然体験がキャンプ指導者の野外指導スキルに及ぼす効果
 [事業報告] ●グリーフキャンプ・フォーラム抄録「子どものグリーフサポートー地域社会の役割・キャンプの役割ー」
 ●Camp Meeting in Japan 2014 ～第18回日本キャンプ会議ー全体会報告 海外のキャンプ事情ー日本の状況との比較からー

■第19巻 (2016/2/15)

[研究論文] ●不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討ー社会教育施設と適応指導教室の連携事例ー ●テーマパークでの修行体験を利用した体験教育の試みーKidzania 就業体験と野外教育の場合ー ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究
 [実践報告] ●民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析 ●高校体育科キャンプ実習報告ースポーツ選手の基礎力を育むことを目指してー ●長期キャンプの意義を改めて考えるー「チャレンジキャンプ2015ーリヤカーで小豆島一周110kmの旅ー」の事例からー ●くしろアウトドアキッズスクール2015 冒険の旅の実践 ●キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム

■第20巻 (2017/2/15)

[実践報告] ●野外救急法を取り巻く最新の動向 ●ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果と考察
 [講演録] ●第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会基調講演ーOrganized Camping in Japanー
 [特別寄稿] ●組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したもの

■第21巻 (2018/2/15)

[研究論文] ●キャンプ実習における大学生の資質能力の変容ーふきだし法による自由記述の分析を通してー ●大学運動部に対するASEプログラムが集団凝集性に及ぼす影響ー新生と在学生の比較からー
 [報告] ●第21回日本キャンプミーティング講演会 自然と手を入れた自然(園芸)の中でー人を育てる野菜作りー
 [特別寄稿] ●野外救急法を取り巻く最新の動向

■第22巻 (2019/2/15)

[研究論文] ●危険な動植物の識別に関する研究 ●大学生を対象とした短期野外教育プログラムの教育効果に関する研究ー大学生不登校問題に着目してー
 [実践報告] ●組織キャンプのプログラムと教育効果ー南会津チャレンジキャンプの実践を事例としてー ●中華人民共和国の小学生を対象とした自然科学学習プログラムデザインの検討 ●北海道キャンプ協会が取り組む次世代へのバトンリレーー次世代野外教育指導者集団「えぞっふ」ー ●野外教育分野を学ぶ学生ネットワークが果たす新たな「学びの場」としての機能ー「大学間交流スキーキャンプ」の活動報告ー ●子供の野外体験活動を促進する「鬼ごっこ遊び」の実践とその成果 ●青少年教育施設で発生した冬期の傷病に関する調査報告 ●Leave No Traceを意識した、キャンプにおける食器洗いの実践

■第23巻 (2020/1/15)

[研究論文] ●日本における組織キャンプのひとつの萌芽ー学習院の游泳演習についてー

[実践報告] ●留学生・外国人を対象とした野外教育・宿泊研修の注意点ー東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科の事例をもとにー ●デイキャンプ実習に参加したC大学保育・幼児教育専攻学生の生きる力の変容ー先行研究(2泊3日)との比較による成果と課題の分析ー ●高校サッカー部新入生を対象とした組織キャンプの実践ーチームビルディングを目的としたAction Socialization Experienceの導入ー ●野外で『うまい飯を炊く』調理法の検討ー飯盒炊飯を負の歴史から考えるー ●地域研究：里山キャンプを考える

■第24巻 (2021/1/15)

[研究論文] ●大正時代から昭和時代戦前期までの社会事業における組織キャンプ(その1)ー雑誌『東京府慈善協会報』より『社会福利』に至るまでに掲載された記事にみるキャンプを表わす用語ー ●野外活動において利便性が高いヤマビル忌避剤の検討 ●青少年教育施設における危険度の高い活動・生活行動の現況と安全対策に関する一考察

[実践報告] ●自立と社会性を育む幼児キャンプの実践 ●コロナ禍における大学野外活動実習の実践報告ー大阪体育大学の取り組みー ●コロナ禍における大学教育での「野外活動」の取り組みに関する一考察

[特別収録] ●2020 年度夏季のコロナ禍における自然体験活動・キャンプ事業に関する実態調査ー第24回日本キャンプミーティングの取り組みー

※ Camp Meeting in Japan 2006ー第10回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010ー第14回日本キャンプ会議までの発表抄録集は『キャンプ研究』(毎巻第1号)として編集されています。

※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集』は有料で頒布しております。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

- ・『キャンプ研究』 各(本体価格 1,000 円+税)送料別
- ・『日本キャンプ会議抄録集』 各(本体価格 1,000 円+税)送料別

なお、以下の号は完売しました。

- ・『キャンプ研究』第2巻、第4巻第1号、第12巻第3号
- ・『日本キャンプ会議抄録集』第1回～第5回

◆ 「日本キャンプミーティング」発表題目一覧

■第1回日本キャンプ会議（1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター）

【研究の部】 ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ペグの打ち込み角と強度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について

【報告の部】 ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的变化 ●冬のサバイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよいあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために ●「O-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●（神戸ー東京）中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第2回日本キャンプ会議（1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター）

【基調講演】 ●全日本学生キャンプの草創

【研究の部】 ●野外炊さんの薪（マキ）の代替燃料に関する研究 ●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察 ●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●グループを理解する～喘息児キャンプにおけるA子を通じて ●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について（2）

【報告の部】 ●ACA アメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS 冒険を通しての体験学習 ●こども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後（1） ●フロンティアアドベンチャー事業のその後（2） ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第3回日本キャンプ会議（1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●台湾における童軍（ボーイスカウト）教育に関する研究 ●ACA 公認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開 ●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の実の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●進学塾における野外教育への取り組み ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●1ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育けやの森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプとNPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について考える（Ⅱ）～5泊6日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアポトーシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第4回日本キャンプ会議（2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター）

※第4回日本キャンプ会議は第5回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第5回日本キャンプ会議（2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげる～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み ●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害児キャンプの企画と運営ーYMCA プロジェクト・SEED のケースー ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第6回日本キャンプ会議（2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組みーハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプでする大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告ーアウトドアパスーツの授業において ●丹波自然塾のあゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さについて ●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッ

キングプログラムの実践報告 ●知的障害児のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローバー隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第7回日本キャンプ会議（2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイトにおける車椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English Immersion Camp における子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ 2003 ●長期キャンプ“わんぱく子ども宿（10泊11日）”の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み ●親子参加型自然学校に関する調査 ●キャンプと音楽療法 2 ●多摩川を題材とした環境教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける女子高校生の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第8回日本キャンプ会議（2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぱくキャンプ ●学校へのキャンプの誘い ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●大学生を集める CAMP ●組織キャンプと社会福祉 ●キャンプインフォメーションセンター相談記録より ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践 ●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第27回ウィンタースクール実践報告

■Camp Meeting in Japan 2005 —第9回日本キャンプ会議（2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●第12回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004 夏の体験学習 夏！君の勇気にか・ん・ぱ・い ●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナーin ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告 ●国際自然大学校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグルー完成（映像発表） ●雪上キャンプでの敷物の断熱効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●野外トイレの研究 ●自然学校が与えた影響について ●山村留学における相談員の業務 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究 ●災害と野外活動（私の体験） ●OBS プログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟（ACF）の創立

■第15回 Camp Meeting in Japan 2011（2011/9/22～25、静岡県立朝霧野外活動センター）

※第15回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立45周年記念 第20回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■Camp Meeting in Japan 2012 —第16回日本キャンプ会議（2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター）

【特別講演】 ●「グリーフ（ワーク）×キャンプ」にできること

【口頭発表】 ●防災教育に必要とされるキャンプ技術～石巻での21日間の支援から～ ●「～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告 ●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」～アカデミーキャンプの実践報告～ ●YMCA フレンドシップキャンプ～子どもらしく過ごせる時間を取り戻す ●県外避難者の子どものケアとキャンプ ●三鷹子どもの楽校 福島の子供たちと森の楽校サマーキャンプ～「つくる」を遊ぶ夏季学校～ ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査—その1 ●レスキューザックの開発と効果 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション ●キャンプ指導者養成におけるスキル習得に関する考察 ●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容 ●年間利用者8,000人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望 ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その1 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響—その1 ●大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題（第2報）

【ポスター発表】 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果(3) —4ヶ年調査結果の分析— ●東日本大震災被災地でのグリーフキャンプの実施報告「岩手しぜんとあそびキャンプ in テンパーク」の取り組み ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その2 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響—その2 ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査—その2

■Camp Meeting in Japan 2013 ー第 17 回日本キャンプ会議 (2013/5/25、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●社員教育研修としての野外活動プログラムの可能性ー Outdoor Training Program を導入した TS Camp ー ●参加目的に着目した組織キャンプ参加者の特徴ー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー ●多文化での野外教育プログラムから考えたこと ●冒険的自然体験キャンプ「私たちの 4 日間」 ●幼稚園・保育園との連携～あかぎの森のようちえん実践報告～ ●岡山県の中山間地域における自然体験活動の実践報告 ●グリーンケアキャンプに参加して～被災地の子どもたちとともに～ ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●静岡県における不登校キャンプの取り組みについて ●国立青少年教育施設の取り組みー新しい公共型運営についてー国立赤城青少年交流の家の取り組みからー ●自然体験活動におけるマダニ対策について考える～広島県での取り組み(報告)～

[ワークショップ発表] ●ウィルダネス教育協会指導者資格認定コースの報告と今後の展望 ●キャンプで使える「手話」表現

■Camp Meeting in Japan 2014 ー第 18 回日本キャンプ会議 (2014/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ● LEAVE NO TRACE の日本での必要性和普及について ●環境ボランティアリーダー海外研修 (ドイツ) 報告 ●組織キャンプにおける Leave No Trace プログラムが参加者の環境に対する態度に及ぼす効果 ●東京 YWCA 森林ワークキャンプ～プロに学ぶ森づくり体験～ ●ウィルダネス教育におけるウィルダネスの場についての検討～わが国での実践にあたって～ ●国際ワークキャンプ参加報告と参加動機に関する調査 ●キャンプカウンセラーのユーモア表出が参加者の集団雰囲気と及ぼす効果 ●大学野外実習が体力・メンタルに及ぼす効果に関する研究 ●キャンプの力はこんなところにも！～ストレス耐性を高める効果～ ●ICU ジュニアキャンパス・キャンプ～大学施設を使った大学らしい子どもキャンプの実践～ ●関東甲信越地区青少年施設協議会青年部会の取り組み～アメージングガイドができるまで～ ●災害時対策教育プログラムの実践について

[ポスター発表] ●キャンプの国際比較 その 1「日本型キャンプ」をさぐる 1-2 日本のキャンプスタイル ●岡山県 A 大学におけるキャンピングインストラクター養成実習の現状と改善策 ●地域のチカラを活かしたコラボレーション～通年型農業キャンプ 風っ子ファームの取り組み～ ●南会津アドベンチャーキャンプの事業評価と地域連携 ●青少年の体験活動等に関する実態調査 (平成 24 年度調査) の報告

[あれこれ発表] ●『ハンディ気象観測ツール』によるアウトドアリスクマネジメント ●アメリカ組織キャンプからの学び ●続・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ●One Minute Camp Evaluation Experiential Education Evaluation Form 改訂版の体験

[全体会] ●海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■Camp Meeting in Japan 2015 ー第 19 回日本キャンプ会議 (2015/5/30、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●わが国におけるアウトワード・バウンドを基礎とした冒険教育の動向についての一考察 ～文献による調査を通して～ ●Day Camp の可能性～1 日の中で子どもたちに主体をあずける～ ●米国キャンプ・オーアトカ (Camp O-AT-KA) における日課プログラムの意義ー余暇教育としてのキャンプ・プログラムー ●北海道教育大学岩見沢校における指導者養成 ●キャンプが児童のアサーション行動に及ぼす影響 ●登山におけるストレスコーピングに関する研究 ●スポーツチームに対する ASE プログラム導入が集団凝集性に及ぼす影響-チーム所属年数に着目して- ●WEA 野外指導者養成コースにおける野外指導スキルの発達 ●災害ボランティアとキャンプ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析 ●スキーキャンプのヒヤリハット ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響 ●大学の授業としての、場に注目したカナダ厳寒期の多国籍遠征 ●あかぎワールドコミュニティ～余暇教育としてのキャンププログラム～ ●自然体験で地域づくり まえばし・マイはし・プロジェクト ●「海ガキ・山ガキになろう！2014 夏」実践報告

[ポスター発表] ●公園における親子を対象とした自然体験活動プログラムの可能性 ●キャンプ体験が参加児童の道徳性に及ぼす影響 ●静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況の推移とアンケートから施設の可能性と課題を探る ●Café de CAMP の作り方ー参加者とつくる空間ー

[あれこれ発表] ●続々・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ●工作体験 (お箸づくり) を通じての安全で正しいナイフの使い方ービクトリノックス工作イベントサポートプログラムー ●ハンディ気象観測ツールによるアウトドアリスクマネジメント(実践編)

[全体会] 子どもシンポジウム ●ろう (豊) の子どものためのキャンプ～デフキッズキャンプ～ ●被災地域の子どものためのキャンプー南会津アドベンチャーキャンプー

■Camp Meeting in Japan 2016 ー第 20 回日本キャンプミーティング (2016/6/4、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表](研究発表) ●国立青少年教育施設における冒険教育プログラムの取組ージュニアチャレンジ淡路島一周ー ●キャンプ体験が小中学生のアサーティブに及ぼす影響 ●大学キャンプ実習におけるストレスとストレスコーピングに関する研究 ●体育授業における ASE の効果について ●森のようちえん活動が幼児

の運動能力に及ぼす影響 (実践発表) ●わが国におけるリープ・ノー・トレイスのこれまでの取り組みと今後の展望について ●知的障がい者に対する日常生活に変化を作り出す地域生活支援—ユニバーサルキャンプを通して— ●チャレンジキャンプ 2015〜リヤカーで小豆島一周 110 kmの旅〜 ●千葉市少年自然の家主催事業「セブンデイズキャンプ」の実践報告 ●オフザピッチトレーニングとしての雪上野外研修プログラムの実践 ●保育内容研究と自然・生活・あそび ●大学授業での長期バックカントリーキャンプ ●ろう・難聴の子どもキャンプに参加した聞こえるスタッフのふりかえり〜デフキッズキャンプの実践から〜 ●町田ゼルビアにおける自然体験活動の実践報告 ●2015年多摩の自然学校 ●無人島キャンプの実践 ●米国大陸横断体験記 [ワークショップ発表] ●キャンプで美味しい！コーヒーの入れ方教室 ●フィールドワーカーのための危険生物“ハチ”“ヘビ”対策セミナー&交流会 ●私たちはリスクに対する説明責任をどう果たすのか How do we achieve accountability for risk? ●環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」を体験してみよう [講演会]つながりを生み出すインプロ(即興演劇)(講師：高尾 隆 氏)

■Camp Meeting in Japan 2017 ー第21回日本キャンプミーティング(2017/6/10、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表] (研究発表) ●キャンプにおけるボランティアマネジメントの日本と海外の比較調査 ●キャンプにおけるふきだし法の有効性について ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ ●スペシャルニーズキャンプへのボランティア参加による知的障がい者に対する態度変容 ●スペシャルニーズキャンプの学生ボランティアにおける自己効力感の変化 ●わが国の冒険教育の動向から探る現代的課題について (実践発表) ●キャンプにおけるバーベキュー食材の新たな有効性 ●森の幼稚園など自然保育にキャンプの知識と技術をどのように活用するか ●少年サッカーチームを対象とした継続型キャンプの実践事例 ●第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会(AOCC2016) 報告 ●大学間交流スキーキャンプの取り組み (団体紹介) ●スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク ●「出会いと体験の森へ」実行委員会 ●北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっぷ」 [ワークショップ発表] ●組織キャンプにおけるチャイルド・プロテクションについて ●YMCA 三浦ふれあいの村防災ウォークラリーの取り組み ●ハチ・ヘビ・マダニ・ヤマビル・毛虫 etc…危険生物を楽しく学ぶ 野外教育者のための危険生物クイズ大会！ ●キャンプでのクラフト ●「違いを祝福し、違いを喜ぶ。」キャンプロイヤル体験報告 ●「アイスブレイク十人十色 〜みんなの十八番、大交換会！〜」 [講演会] 自然と手を入れた自然(園芸)の中で〜人を育てる野菜作り〜(講師：藤田 智 氏)

■Camp Meeting in Japan 2018 ー第22回日本キャンプミーティング(2018/6/9、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表] (研究発表) ●アウトドアリーダーシップに関する文献研究 ●危険な動植物の識別に関する研究 ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ(第2報) ●青少年教育施設における指定管理者制度導入の状況と課題 ●参加児童生徒のもと組織キャンプ経験の自伝的記憶 (実践発表) ●森の幼稚園など自然保育における野外活動の知識と技術の実践 ●こども英語教室ラボ・パーティファミリーキャンプ実践報告 ●キャンプファイヤーにおける民俗芸能のレクリエーションとしての活用 ●キャンプ指導者向けのスノーキャンプ・スキーイベントに関する研修事業の試み ●第11回国際キャンプ会議 Sochi・Russia と ICF の活動の報告 ●西表島 LNT プロジェクト (都道府県キャンプ協会取り組み紹介) ●Enjoy Camping! キャンプを楽しむたっぷり学ぶ(東京都) ●静岡県キャンプ協会(静岡県) ●持続可能な協会運営の知恵と工夫愛知県キャンプ協会のとりくみ(愛知県) ●近畿ブロックにおけるビジョン 2020 の実施状況(近畿ブロック) ●広島県キャンプ協会の取り組み(広島県) (団体・活動紹介等) ●スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク ●北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっぷ」 [ワークショップ発表] ●目からウロコの SAM スプリント固定法 ●誰でも手軽に自然体験活動が指導できるアウトドアゲーム ●「アイオレシート」の紹介 ●企画博覧会『ヒアリとその他の危険生物展』&危険生物お悩み相談会 ●アウトドアメーカーが直接紹介する最新キャンプグッズ(提供：ロゴスコーポレーション) [講演会] うんこはごちそう〜人と自然の共生は野糞から〜(講師：伊沢 正名 氏)

■Camp Meeting in Japan 2019 ー第23回日本キャンプミーティング(2019/6/8、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表] (研究発表) ●国際的なキャンプのムーブメントを探る-International Camping Fellowship の活動の分析から ●指定管理者制度導入に伴う都道府県・政令指定都市設置のキャンプ場における公費負担に関する研究 ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ(第3報) (実践発表) ●障害者支援施設でのキャンプ実践 ●キャンプディレクター2級養成講習会について-東京都キャンプ協会の事例から- ●第7回大学巻交流スキーキャンプの報告-その価値と今後に向けて- ●高校サッカー部新入生を対象とした2年間の ASE キャンプの実践 ●次世代野外教育指導者団体「えぞっぷ」による北海道キャンプフェスタの取り組み ●キャンプ指導者を対象とした研修事業の実践〜東京都キャンプ協会の試みから〜 ●南郷山天幕生活をふりかえる〜日本 YMCA キャンプ 100 周年〜 ●大和川を 20km 歩くキャンプ-小学2年生にどこまで任せるか?-

[ワークショップ発表] ●野外教育史 ●防災減災教育論 ●キャンプと法律(入門) ●キャンプ推理学 ●外国人・留学生を対象とした引率方法論 ●キャンプの安全マネジメント ●自然体験活動における絵本活用法 ●組織キャンプにおける大学生カウンセラーの在り方とこれから
 [講演会] 令和時代の新しいキャンプに向けて-昭和・平成時代の「野外」の変遷とこれからのキャンプに期待すること- (講師: 星野 敏男 氏)

■Camp Meeting in Japan 2020 - 第 24 回日本キャンプミーティング (全 4 回、オンライン)

[第 1 回オンラインミーティング (2020/6/6)] どうすれば、キャンプができるだろう [第 2 回オンラインミーティング (2020/7/4)] この夏、キャンプどうする? [第 3 回オンラインミーティング (2020/9/30)] この夏、キャンプどうだった? [第 4 回オンラインミーティング (2020/11/14)] これからキャンプ、こうしませんか (スペシャルスピーチ) ●~世界の with コロナ×キャンプ~ John Jorgenson 氏/Jeff Bradshaw 氏/Ruth Feng 氏/Tom Rosenberg 氏 (研究発表) ●新型コロナウイルス緊急事態宣言下における、子どもの余暇の過ごし方について ●長期自然体験活動が小学生の学校における適応感に及ぼす影響: S 小学校セカンドスクールを事例として ●民間の野外教育団体の組織キャンプにおけるプロダクト構造の分析 (実践報告) ●〈ONLINE×CAMP 空想キャンプ場〉の取組みと今後の可能性について ●コロナ過でも四季冒険 ●ろう・難聴児のためのオンラインキャンププログラムの試み: デフ・アドベンチャー・キャンプ・オンライン 2020 ●バーチャルキャンプをやってみよう! ●夏の自然体験活動・キャンプ事業実態調査報告 (ワークショップ) ●キャンプ、自然体験の魅力を伝える動画制作の現場から ●コロナ禍での小学生冒険プログラムの現場から ●石垣島のフィールドからコロナ禍でのプログラム紹介 ●若手ワークショップ「オンライン OB 訪問」 ●オンラインとキャンプをつなげる、農業体験の現場から (パネルディスカッション) ●これからキャンプ、こうしませんか? ~キャンプの再開から、質の高いキャンプ実践へ!~

■Camp Meeting in Japan 2021 - 第 25 回日本キャンプミーティング (2021/9/20、オンライン)

[シンポジウム] ●イマドキのキャンプ [ワークショップ発表] ●すべての人に星空を - 星と人をつなぐ仕事- ●子どもたちに「ライフジャケット」を! - 思いはただ 1 つ...子どもたちの命を守ること- ●登山案内図に見る富士登山 ●キャンプ協会で頑張る若手の集い ●絵本の話を通して考える「おいしくカレーをつくるポイント」 ●レクで人気のじゃんけんゲームで触れる、キャンプの装備・安全! ●オンラインや 360 度カメラを使用した stayhome での自然体験の検討 ●なぜ、馬や自然は子どもの育ちにいいのか? ~ホースセラピーの現場から~ [研究発表] ●日本キャンプ協会「キャンプ保険 (国内旅行傷害保険)」の事故分析 ●アフターコロナのインバウンドキャンプ市場 (中華圏) の可能性 [実践(取り組み)発表] ●コロナ禍のキャンプ実習-オンラインでやってみた- ●自然学校と企業・メーカーとの連携に向けた取り組み ●密を避けた野外炊飯 (鉢輪炊飯) ●都道府県キャンプ協会の取り組み事例報告会

編集後記

『キャンプ研究』第25巻をお読みいただき、ありがとうございます。この場を借りて、論文査読、作成にご尽力くださいました皆さまに、心から御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の拡大から2年。With コロナの道を模索し、新しい生活様式が平常と化したものの、2021年は多くの時間を緊急事態宣言下で過ごすこととなりました。日常の行動が制限されるなか、アウトドアは記録的なブームが続いています。多くの人が知らず知らずのうちに、自然のなかで得られる五感への刺激、癒しを求めているのでしょう。社会的にも改めて自然体験の重要性を見直す結果となりました。

今号の『キャンプ研究』では社会福祉の観点から見たキャンプの歴史のほか、キャンプや自然体験の心的影響に関する投稿が揃っています。

是非、これら貴重な情報を皆さまの実践活動にご活用いただけますと幸いです。

自然の中での体験活動が人々に与える効果を知っている私たちは、自然体験の素晴らしさを社会により広く発信できるはずです。

キャンプ研究

第25巻 2022年1月15日発行

編集発行者 公益社団法人日本キャンプ協会 キャンプ研究編集事務局

発行所 公益社団法人日本キャンプ協会

National Camping Association of Japan

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

国立オリンピック記念青少年総合センター内

TEL 03-3469-0217 FAX 03-3469-0504

E-mail ncaj@camping.or.jp

© 公益社団法人日本キャンプ協会

写真、論文、資料のコピー、複製・転載を希望される場合は、ご連絡ください。



NCAJ

National Camping Association of Japan

キャンプ研究

第25巻 2022年1月発行

ISBN978-4-904008-18-8

C9075 ¥1000E



研究論文

大正時代から昭和時代前期までの社会事業における組織キャンプを表わす用語「慈善旅行」「修學旅行」
—雑誌『東京府慈善協會報』より『社会福利』に至るまでに掲載された記事をもとに—
中島 豊

コロナ禍にある大学生のメンタルヘルスと自然とのふれあい経験の関連
佐藤 冬果・窪田 辰政

大学生のキャンプ指導経験量がヒューマンコミュニティ創成マインドに及ぼす影響
伊原 久美子

実践報告

コンピテンシーとキャンプ —デイキャンプを通してコンピテンシーは育成できるか—
渡邊 尊斗・倉品 康夫

資料

「キャンプ研究」投稿規程

「キャンプ研究」収録題目一覧

「日本キャンプミーティング」発表題目一覧



NCAJ

National Camping Association of Japan

定価 (本体価格 1,000 円 + 税)